

第二章 軍 事

第一節 戊辰の役

従軍各隊

慶応四年、朝廷側と幕府側の内戦である戊辰の役には、いろいろな隊が朝廷側として従軍した。

鹿児島の本府では本府第一番隊から本府第十八番隊まで、一番遊撃隊から四番遊撃隊、兵具一番隊から三番隊まで、外城一番隊（高岡）、二番隊（加世田、伊作）、三番隊（市来他）、四番隊（出水他）、五番隊（国分他）、六番隊（川辺）、番兵一番隊から六番隊まで、私領一番隊（都城）、私領二番隊（鹿籠、知覧）、私領三番隊（加治木）、私領四番隊（宮之城）、私領五番隊（岩川）、重都隊（重富、都城）、吉部隊（財部、末吉）、清日隊（清水、日当山）一番砲隊から四番砲隊まで、臼砲隊、加治木砲隊、大小荷駄、春日艦、乾行艦、出水隊、平佐垂水砲隊、垂水隊、帖佐隊、鹿屋小根占隊、顯姪隊、天草鎮撫隊、苗代川隊、加世田指宿隊、喜入隊、伊集院郡山隊、

高江水引隊、隈之城串木野隊、阿多隊、本営附等。

以上のような各隊で、出軍者は七、〇〇〇とも八、〇〇〇ともいわれ、戦死者も五七〇余に及び、薩摩藩が戊辰戦争の主導的役割を果たした。

私領五番隊

岩川の郷士が戊辰の役に出征した事績については、丸山芳雅（本名義武）が昭和七年に「私領五番隊戊辰従軍史」を執筆、「贈咲郡岩川町教育会編集」として刊行されている。この著は大津十七隊長の写真をはじめ、隊士の写真等を口絵に岩川小隊士の氏名から、幕末の世相を最初に概説、出軍を願ひ出た経緯から、北陸道征途に上った岩川隊、関川村の戦闘、荘内藩の降伏、鶴岡城の受取り、江戸滞在から帰国、従軍の結果と現在の岩川町というように述べて来てこれらの内容をなす貴重な隊士の日記、大津十七談話手記乞覚書等を附録として加えている。これは岩川郷建設の基盤となった戊辰役従軍を丹念にまとめた丸山芳雅の偉業である。ここにはこの「私領五番隊戊辰従軍史」から、要約して記しておく。

岩川の領主伊勢貞章は島津家重臣の一人で禄高七千余石千石馬場組の内でも主だった人であった。この貞章は

前之浜の天保山、弁天等の台場の固めを申し付けられていたが、勤務に僅かな手落ちがあったのに対し、かねて不仲の川内平佐の領主北郷作佐衛門から主君に中傷され、そのため藩主から勤務不届、後世見せしめのために強制隠居を仰せつけられ、子の隼之助は十三歳であったが、跡目相続を仰せつけられた。こうして僅かに伊勢家の跡だけが残ることになった。

このため伊勢家の家臣は大いに憤慨し、主居を陥れた北郷家に斬り込みをかけて意趣を晴らそうとした。有村蘇淳、古藤今太、海江田平右衛門、吉瀬太助、山下喜左衛門の重臣は集会し、密謀を廻らし、同志の名簿を作り、血判して北郷家斬り込みをきめていた。このことを大津十七が聞いて、大いに驚き、この暴挙を中止させようと説いた。しかし過激派の同志達は、四十七士の例をひき、主君の罪を晴らすのだ、主君が無実の罪に泣くのを座視することは出来ないと行って、なかなか聞き入れない。これに対して大津は伊勢家が滅亡して跡目もないのなら、このことを決行してもいいが、伊勢家は幼主ではあるが相続されている。それに事を荒だてては、折角の跡目も滅亡へ導くも同様だろう。北郷を斬っても更に報復も用心しなければならぬし、主家は遂に滅亡に到るで

ある。だからこうした暴挙はやめたが賢明であると、大津の説得に、一党も漸く納得した。

しかし家臣たちの恨みは骨髓に達していたので、主君の無実の罪をはらす何等かの方法を見出して、伊勢家々臣の気骨のある所を見せなければ収まらなかった。そこで大津は、「前之浜台場の勤務を怠ったのは、軍務上の失態である。それでこの罪を償うには、矢張り軍功をたてるに限る。軍功をたて、伊勢家の名を挙げるのが一番得策であり、唯一つの我々の進路である。軍備を充実しておけばこの騒乱の世では、どんな軍功を立てる機会はいくらでもある。と大津は語りそして次のような大策を発表した。それは精鋭な銃器百二十挺を購入することを歎願することであったが、一同はそんなことを今頃申出たら主君の気性短慮のため御手討は必定と危ぶんだ。しかし大津は伊勢家を思えば、手討、切腹なんの恐れる所がある、若し余が手討ちになったら、後の者が続いて決行してくれと決心を披瀝した。そこで大津死せば吉瀬藤左衛門、吉瀬が倒れたら松元彦五郎というように事の成功するまで決行しようということになった。

翌朝、大津十七は役座に出頭して、松元彦八、有村郷右衛門の両名に、伊勢貞章に目通りを願ひ出させた。そ

の前に小山新助から昨夜の重臣の協議の次第が貞章に話されて居り、貞章も意外に喜び、家臣の誠忠に感激、一切の計画は聞き届ける、もう大津に直面する要もない、役々と相談して在庫三百俵を自分の資に充て、何でも必要な武器を購入せよとのことであったという。これを聞いて一同は非常に喜んだ。事は意外に早く運んで、これから伊勢家の主従は軍備整頓に入ったのであった。このことは慶応二、三年のころである。百二十挺の数は、当時鹿兒島、谷山、岩川にいた家臣で、戦場に出られる士族の数から割り出したものであろう。この百二十挺の銃は、薩藩御軍役方沖直次郎が藩用で長崎表に出張するので、その人に依頼してミニエル銃を購入してもらおうようにし、この人の尽力で百二十挺が買求められ、慶応四年正月十日鹿兒島に届いた。銃は村田銃で名高い村田経芳が銃僻を試射し、各人に交付した。

慶応四年正月三日に鳥羽伏見の戦が始まった。その騒然とした世相の中、正月十日には百二十挺の銃が届き、同じく十二日には伊勢家臣で組織した私領五番隊に出兵の内命があり、宮之城領主島津図書に召し附けると藩庁からの達示があった。隊員は喜んで出兵の期日を尋ねた所、島津図書病気で当分出発出来ぬということであっ

た。そこで御軍方役方には一日も早く出兵出来るよう願ひ出で、一方では私領中の兵士を集め、新調の銃器で練兵をした。一同は天保山陸軍所、州崎、お砂揚場で連日猛烈な訓練を受けた。こうして一ヶ月間の訓練を受けて、岩川隊士は郷里に帰り、待機することになった。

岩川隊士は前記のように宮之城の島津図書の配下に入っていたが、図書が病気のため一向出兵しないので、しびれをきらした岩川隊幹部は、遂に単独出兵の運動を起こし、遂に成功して、私領五番隊として出兵することになった。

この間、京都方面では鳥羽伏見の戦終り將軍慶喜は大阪城から夜に乗り、軍艦に乗り、江戸へ逃れ、朝廷方では、征東総督宮、西郷参謀等の官軍が江戸に下り、四月江戸城の明渡し、上野に立籠った彰義隊を破り、征旅は奥羽の方に向かっていた。

こうした情報を聞きながら、岩川隊が待った出兵は、漸く六月に入ってからであった。脾肉の歎にたえなかったことであろう。岩川を六月八日七ツ時出発、福山に行き、福山から船に乗って鹿兒島へ行き、南林寺脇の寺へ宿を取り十二日久吉丸に乗って夕方征途に上った。船は山川港に入って碇泊、十三日早朝港を出て、開聞嶽の下

を廻り、向かい風に難航しながら、久志港を経て、出水沖、天草沖、長崎沖を通して、北九州沖から下関海峡に入った。この時折からの大暴風雨に隊士は苦勞をなめ、瀬戸内海を過ぎて、七月九日大坂に到着、川ぶねに分乗して箱立御屋敷へ宿営した。

こうして、坂に着いたが、御家老永吉領主島津中務から当分は大坂表に滞在して後命を待てとのことだったが、一同失望落胆した。それから京都に行くことになったが、京都では守備が任務で、島津中務の指図を受けた。しかし隊士たちには京都守備は不満で、第一線の実戦に早く出たかった。岩倉公にもたびたび歎願したがなかなか出軍の命は出なかった。その間も兵の訓練は怠らず、実弾射撃をしたり、島津中務の練兵検分があったりした。このころ、岩川小隊百余名に鉄砲袖（上衣）、ばっち（ズボン）それに錦の袖印、白切れの袖印更に御酒まで御下賜になった。岩川隊一代の光榮であった。

京都滞在中まで隊長であった松元彦五郎は眼病のため除隊となり、代わって大津十七が小隊長となった。

七月二十日隊長に命が下って、二十二日いよいよ北越方面に向かって出兵となった。待ちに待った出兵で、岩川隊士は勇躍京を出発した。

大津から船で海津に渡り、敦賀に出、船を待ったが来ないので陸行して越中高岡に着、岩瀬という今の富山市より二里くらいの所に行った。八月十八日夜である。この行程は現今の福井県から石川県を過ぎ、富山県に入っているのである。だんだん敵地が近づいて来て、隊士も緊張してくる。最初の目標地長岡も遠くない。

岩瀬から三日市、ここまで富山県で、次は新潟県に入り市振、柏崎、水原を経て新発田へ着いたのが八月二十八日夜この新発田には本営があつて、仁和寺宮がいた。これから村上、中村等を経て、九月五日夜荒川に着、ここには台場があり、それを守ることになった。

岩川隊士が北陸行軍中の官軍幕軍の戦況は、岩川隊が敦賀へ到着したころ、いったん官軍の占領した長岡城を七月二十五日幕軍が奪回した。これを更に官軍は奪回しようとして、西郷隆盛は軍艦を率いて新潟に上陸した。そして官軍は三道から長岡城を攻めてこれを奪回したのが七月二十九日。岩川隊が敦賀滞在中である。幕軍はこれから会津、村上方面に潰走した。官軍は逃げる幕軍を追うが、長駆して北越及び会津へ進出した。本営は新発田へ移された。岩川隊は本営に出頭して指揮を仰いだ。本営では会津口へ向かうかということであつたの

で、一日でも早く実戦にのぞむ方へ廻していただきたいと申入れ、それで最も難所で、強敵のしかも官軍の手薄な北越へ廻されたのであった。

これから岩川隊の奮戦した関川村の戦闘に入る。

荒川の台場に岩川隊は一分隊ずつ、交代で詰めた。九月八日銃声を聞いた日記があるがこれが恐らく戦地の第一銃声であろう。いよいよ戦場である。幹部は軍議、隊士は台場堅、夜警夫卒は新しく募集した夫卒と共に忙しくなった官軍は関川口その他へ大進撃をする事になった。岩川隊は最初小名部口に向かうつもりであったが、変更になって関川口に向かう事になった。この方面の先鋒は一番は高鍋隊二番は附士隊、三番が我隊であった。

岩川隊が守備していた荒川村台場は、最初、長州藩岩国の兵隊が守備していたのを、岩川隊が継ぎ、今度の進撃で後は土佐藩兵（あるいは越前藩兵）へ渡した。

九月十日岩川隊士は荒川村から中継、大代を経て、一時は苦境に陥ったが、奮戦の結果遂に敵を撃退し、そのまま進撃した。しかし敵弾が雨霞のように来るので、大津隊長は川の中に飛びこみ、川底をくくって敵に接近し、川岸に上り附近の民家に馳せつけると、戸を一、二

枚開放した所があり、そこから椽に飛びあがると内部から一人の敵兵が銃口を大津の胸に擬した。その間一髪の時、大津は躍り込んでその敵兵を斬った。続いてそこにかくれていた二名の敵兵も斬り捨てた。こうして友軍と奮戦した結果、夜になって敵は退却した。なおこの大津をねらった銃は、戦利品として大津の私有を許され、同家に所蔵されたという。この銃は英国製元込銃でスターフル銃であった。

この関川の戦では附士、岩川、高鍋の三小隊入り乱れて突撃して敵を破り、民家に火を放ち、その辺にうろつく者を追い散らした。このため関川方面は人も稀になり、民家は炎に左手の山手を通して川を溯った。この道は道もない山の中を岩にすがり、雑木にひっかかりながら峠を越えた。これは道順から言えば雷峠や小鍋へ出る堀切峠を行くのであるが、やはり作戦の都合であったろう。この道のない山越えをしたのには、幕軍も驚いたという向こう側の記録がある。

こうして大代の嶺を踏破したが、予想外の難所で時間がかかった。十一日の未明には関川の敵兵を撃破するつもりであったのが、既に正午になっていた。そこで大津隊長は高鍋隊長の荒井陸之助と二人連れ立って、敵の哨

兵の間を抜け出ようと搜索に出たが、敵の哨兵が目につき、敵はまだ当方を発見していないことがわかったので、ひそかに本隊を降ろしても差支えないということになり、全隊直ちに岩壁を馳せ下り、関川に飛び込み、川を渡り、前から計画していた持口に兵を入れた。これから附士隊、高鍋隊、岩川隊全く入り乱れて奮戦した。

この戦闘で岩川隊馬場正之進と松元彦助が重傷した。この二人は十一日晚はそのまま、附近の民家に寝かせ、十二日早朝戸板に乗せて病院へ送った。病院は中継にあった。この外友軍の附士隊の向田某が戦死、全隊では数十名の負傷者があった。一方、敵の損害は非常に多かったらしく、敵兵の死骸遺棄も相当あった。こうして関川村を占領したが敵は関川村の回復を計った。敵は頑強に抵抗して、味方は非常に苦戦になった。その中、岩川隊の半隊は隊長に無断で雷村の方へ行って、残るは、岩川隊半隊と高鍋隊半隊だけとなった。関川村守備が危ぶまれている中に夜になる。夜は寄手には都合がいいが、守備側には苦手である。そこで大津隊長は、いったん占領した土地を敵に取りかえされると、それをまた占領するには前の倍も三倍もの苦勞しなければならぬ。も一度占領するだけの半分の力があれば、いったん攻め破った陣

地だから持ちこたえが出来るはずだ。というのであった。そこで隊士は散兵して一睡もせず、順々に発砲して敵を威嚇し、兵がたくさんいるように見せかけて、敵の夜襲を避けたのであった。

こうして無事夜が明けた。前日敵が遺棄した首級二個を本道に木をたててそれにかけた。これは敵を怒らせる方法としてとったのであるが、果して敵は本道によって山腹から猛烈に射撃して来た。そこで味方も同じ高度の場所から約二時間応戦したが、敵は頑強に抵抗を続けるので、我隊は一小隊散開のまま突撃を敢行した。これでやっと敵は退却した。この後で敵は屍骸及び負傷者五、六名を遺棄していた。

その後三日間は大した戦もなく過ぎしたが、九月十五日夕方から戦機が動き、翌十六日は大決戦となった。

十五日夕方から夜にかけて敵前一町ばかりの所に台場を築き、十六日朝からその台場によって互いに応戦していた。その中、大津隊長は十人の部下を率いて斥候に出ることになり、偵察に出かけたが、急に敵の本隊とも思われる一大隊ばかりの兵が一列に突撃して来た。しかし味方は一人も退かず、射撃を続けたが、何しろ僅か十人の人数である。そこで大津は味方を大隊のつもりにして

号令をかけて、敵をあざむいたりした。しかし味方はだんだん負傷者が出て、松本彦次郎、神宮司庄五郎、馬場休八、山下助五郎、有村彦右エ門の五名は傷き倒れた。

この負傷兵は中継病院へ送った。この戦で敵も五、六名は戦死したが、その中には服装から見て長官と思われる者もあった。こうして負傷者が次々と出る苦戦の最中、味方の一個大隊くらいの援兵が来た。その上臼砲まで来て、敵壘を砲撃する。隊士の意気はあがった。敵味方共兵数は同じ位であったが、臼砲を受けて敵は俄に周章て、混乱し、皆大島（山形県東田川郡）の方面へ退却していった。

この戦は岩川隊にとって、最後まで最も激しい戦闘であった。この一戦でこの方面全線の戦闘が大体終わったのであった。十七日以後はただ小競合だけであった。しかし敵の失地回復の計画にそなえて守備を固くした。砲声が時々各所から聞えて来た。

九月二十七日、庄内降伏の知らせが来た。会津の松平容保が九月十九日帰順を乞い、二十二日に大手門に降伏旗を立てているので、酒井忠篤も二十三日降伏した。それが二十七日になって通知になったのである。これで戦争もすんで、敵の本城に入城することになる。

総参謀からの廻文は、庄内藩主の降伏と関川を引き揚げて鶴岡へ乗込むようにとのことで、各隊は、この二十七日昼頃には出発したと思われる。翌二十八日午後鶴岡の城下に到着した。ここは酒井氏の本城で、高十七万八千石領である。現在の山形県鶴岡市である。

敵の城下へ勝軍として岩川隊は滞在していたが、十月一日（或は二十九日）になって西郷参謀から庄内城受取りに行くようにと命令を受け、鶴岡城に入城、城内で小銃三千挺を収めた。

この先登第一に岩川隊乗込、城受取りは岩川隊の榮譽を最後に飾るものであり、このことについて、「大津十七談話筆記」があるので、記して、当時をしのぶことにしよう。

「庄内本営ナル西郷総参謀殿ヨリ私領五番隊長大津十七へ直ニ本営ニ出頭スペシトノ使者ヲ受ケタルヲ以テ急ギ本営ニ出頭シタルニ総参謀ハ今回庄内藩主酒井佐衛門尉ハ米沢口出デテ帰順シタリ。コレニツキ岩川小隊ノ関川附近ニ於ケル戦功ヲ讃ヘラレ、私領五番隊ハ庄内城ヲ受ケ取リニ行クベキコトヲ命セラレタリ。

而シテ城受取りノ際ハ兵士ニハ悉ク高足駄ヲ用キシメ、堂々城門ニ繰リ込ミ、玄関ニ臨マバ城役人ハ出デテ玄関ニ手ヲ付キ叩頭スルニヨリ唯目礼ヲ以テ之ニ答ヘ、我隊当城

ヲ受領スルヲ以テ検分ノ案内ヲ為スベキコトヲ命じ、一同城内ヲ検分シ、巡視終ラバ玄關に出デ来リ当城ハ我等既ニ受取リタルニ付、一同ハ之ニテ引取ラルベシト挨拶セヨトノ注意アリシカバ其ノ指示ニ従ヒ首尾ヨク庄内城ヲ受取リ暫ク城内ニ休憩シ守備ヲ他に引キ継ギタタリ

こうした城受取りという榮譽で岩川隊に西郷が与えたのは、やはり関川攻略の功であるが、この戦には附士、高鍋岩川の三隊が参加したのに、その内で小隊でもよく大敵を破った岩川隊の功績が認められたのであった。

一週間前後庄内城下に滞在して、鶴岡城の受取りをすませ、いよいよ村上の本営へ引き上げることになった。

十月五日七時半時分出発、三瀬（山形県西田川郡豊浦村）泊り六日は三瀬から鼠ヶ関の間は海岸沿いで道が屈曲している。七日は鼠ヶ関から岩村（新潟県岩船郡）、中村、武富（共に同郡）八日、猿沢（同郡）を経て村上城下に到着し、ここに滞在した。

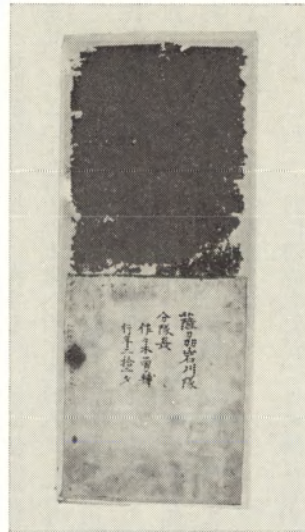
村上では約二ヶ月間滞したが、この間に岩川隊は城内外の堅め、調練をして過ごした。しかし戦争はすんだといっても、調練と玉打は相当はげしかった。この村上滞在は、敵は降伏したとは言え、簡単に兵を引き揚げられるものではないので、駐兵させたのである。

村上滞在二ヶ月の後、いよいよ帰国の命令が出た。十二月八日出発、滞在中知己も出来たと見え「皆泣々名残おしく」別れている。新発田から新潟に出て、日本海沿岸を通り、直江津、長野を通り軽井沢に出て江戸に登る道をとった。こうして十二月二十九日には板橋に着いた。この年、年号を明治と改元、江戸を東京と改称（七月）。明治二年正月元旦東京に入る。大名小路本多家へ入る。御屋敷から焼酎や酒を一同に祝儀として頂いた。東京滞在中は毎日愛宕や両国など江戸見物で過ごした。正月十日には伊勢家中興の英主伊勢兵部少輔貞昌公のお墓参りをした。貞昌公の墓は二本榎、高岳院にあり、岩川隊は隊伍を整えて行軍した。正月二十三日いよいよ東京を出発、帰国の途についた。陸路東海道を下り、大阪へ着きここで借入れの英国船に乗って兵庫へ一旦寄って紀淡海峡を抜けて、土佐沖を廻り、一路鹿児島へ帰った。二月十八日、鹿児島の前浜に着船、自宿に帰る。翌十九日は宿に滞在、「二百六十余日苦楽を共にし生死の巷に出入した岩川隊」を解散した。隊士はそれぞれ鹿児島、谷山、岩川へと各自我家をさして帰っていった。岩川の隊士は二十一日朝鹿児島を出発、船で福山に来て宿泊、翌二十二日朝出発、坂上迄馬の迎えが来たので、それに

乗って二重堀に着き、それから御仮屋に着き、我家へ帰った。昨年六月九日岩川を出発してから二百五十有数余日目である。



私領五番隊分隊長佐々木勇輔高盛



私領五番隊分隊旗

岩川小隊士氏名

領主

(隠居号拙翠) 伊勢弥九郎貞章
(健彦) 伊勢隼之助貞固

監軍 御城下武士

同 同

小隊長 初半隊長

半隊長 初分隊長

分隊長 初小頭

小頭

初戦兵

〃

〃

初戦兵

〃 初戦兵

〃 四役場(玉薬方)

〃 (兵糧方)

〃 医師

〃 楽隊(太鼓)

〃 同(笛)

〃 同(喇叭)

〃 戦兵(鹿兒島人数)

〃

〃

〃

東郷六郎兵衛

八代 幸次郎

大津 十七

吉瀬藤左衛門

佐々木 勇輔

大津 仲吾

川崎柳右衛門

山下 彦太郎

松元 彦助

有村彦右衛門

山口 助四郎

西 仲左衛門

牧之瀬十兵衛

有村 淳庵

白石 竜太郎

黒木太左衛門

瀬戸口 敬齐

有村 源太郎

松元 彦次郎

古藤 養八郎

佐々木勇次郎

熊谷 半助
熊谷 新七
熊谷實(小)茶
海江田清之丞(城介)
古藤 孝太郎
蓑田 伝斉
蘭田寛右衛門
東条 藤太
川野軍兵衛(平)
池之上喜之助
東条 源吾
谷川 留次郎
有川 寛兵衛
赤池新左衛門
池之上 平助
山下 平八
神宮司 喜八
東条藤五左衛門
山口 正蔵
谷川孝右衛門
加塩 良之進
有川市左衛門
牧之瀬清左衛門
山下清左衛門

/// // // // // // // // // // // // // // // // // // // //

(初小頭)

429

坂口	山下	坂口	竹下	坂口新左衛門	牧之瀨	牧之瀨	川野	荒武	荒武	大保	牧之瀨	井之上	山下	藤崎	三坂	浜崎	岡留	吉田
万次郎	左衛門	助八	右衛門	左衛門	新右衛門	清之丞	清太郎	藤市	藤平次	正八郎	次郎	善五郎	助五郎	左衛門	喜左衛門	喜兵衛	武助	七郎

// // // // // // // // // // // // // // // 夫 // 夫頭 旗手 // // //

西	助太郎	川野八右衛門	三坂	惣太郎	牧之瀬	直助	福留鹿右衛門	上別府仲右衛門	重久六右衛門	鎌田源右衛門	滿	郷右衛門	豐永正左衛門	小浜計佐五郎	川辺	十兵衛	大村	源六	中村清左衛門	竹下	計佐助	金沢新右衛門	永山	善太郎	米沢源次兵衛	八木	伝計佐	八木	釜市	上田	清助	榊原計佐五郎	山下四郎左衛門	八木	助八
---	-----	--------	----	-----	-----	----	--------	---------	--------	--------	---	------	--------	--------	----	-----	----	----	--------	----	-----	--------	----	-----	--------	----	-----	----	----	----	----	--------	---------	----	----

〃
旧小隊長
白浜 助次郎
松本 彦五郎

右於京都眠病ニ罹リ辞職
馬場 正之助

旗手
右郡奉行方ヨリ御用細工ニ付御相談ニテ除隊ス
竹下 次郎助

兵士
右出発ニ当リ流行病ニ罹リ除隊ス
中島清右衛門

銃砲機械師
右者別船ニテ風波ノ為秋田領ニ着船依テ秋田本營

右式名ハ開戦前ヨリ京都へ相詰居候者ニ有之候
上田 七兵衛
上田 太助

合計百二十四名 内戦死一名
内訳 幹部及役員 十七名

戦兵 八十一名
夫方 二十一名

其他 六名

私領五番隊従軍者の中に夫卒がある。夫卒は食糧や弾薬を運搬する役目で、当時百姓の中から任命された。これらの夫卒はすべて岩川（内一人月野）の人たちで、当時の百姓は門割制度の中にあつたので、氏名は門名と名で示される。徳重門六右衛門日記、福留門鹿右衛門の

「庄内合戦ニ付日記」や花牟礼新左衛門の「出軍日記帳」の中にある夫卒の名は、すべてその頃の呼び名で、花牟礼日記の分は門名を省いて名ばかり記しているが、出身部落を書き入れている。「私領五番隊戊辰従軍史」の最初の方に出ている夫卒の姓名は、その後の姓名であるので、出征当時の名とその後の姓名とを、前記三冊の日記によって、記して置いた。なお、「従軍史」冒頭の名簿には夫卒二十一名と出ているが、徳重門六右衛門日記では、はつきり二十名と記し、二十名の名を挙げ、福留門鹿右衛門と花牟礼新左衛門日記ではそれぞれ二十名の名を挙げている。「従軍史」冒頭の名簿の二十一名には「白浜助次郎」の名があるが、他の日記には、白浜助次郎の名はない。白浜助次郎は月野市柴門の助次郎であるが月野からどうして岩川隊に加わったかわからない。

従軍日記には、馬場正之進日記、有川、谷川、四〇日記、海江田城介日記、川崎柳右衛門日記、花牟礼新左衛門日記、山口長兄日記などと、六衛門日記、鹿右衛門日記とがある。これらの日記は戊辰役出軍の状況を詳細にあるいは簡略に記録しているが、各日記それぞれの特色もあって、これらの日記を合せ読むと興味深いものがある。

右の中、六衛門日記と鹿右衛門日記は、夫卒の側で記録した日記である。もともと鹿右衛門日記は六衛門日記の写本といわれる。これらの日記は夫卒の側の様子が簡単ではあることが伺える。十月六日、七日頃、三瀬、鼠ヶ関などを行く処は、本隊と夫卒隊との行程が変わっている。夫卒の方は荷物を運ぶので、自然道の選び方もちがう所もあったのだろう。

馬場正之進日記には六月の出軍以前の行動が記録されている点、貴重な資料であるが、六月八日岩川を出立する時の様子の記されているのも興味がある。「有川、谷川、四〇三日記」はほとんど同一のもといわれ、書いた人もわからない。海江田城介日記は前後二冊あり、前編は出軍者名簿を最初に出し、出軍日誌を精しく記録し、後編は越後村上から帰国の道中を記録している。日記の中で最も貴重な資料である。川崎柳右衛門日記は割に簡単な記録であるが貴重な資料である。花牟礼新左衛門の日記は出軍者の名簿を冒頭に出しているが、手負人数十五人を九月十一日と九月十六日にわけて列記していることや、夫卒の名簿では出身部落を記入していることが特色である。本文は川崎日記の模写といわれる。山口助四郎日記は越後村山出立から大阪出帆前迄を記録して

いるが、山口助四郎は会計を司る四役場を勤めた人で、会計のこともくわしく記録している。

日記は以上のようなものであるが、私領五番隊従軍に至る動機から戦争の様子までを、軍の先頭に立った大津十七の談話を息^{はた}廿が記録した「大津十七良実談話筆記」は最も貴重な資料で、私領五番隊の骨子をなすものである。

花牟礼新左衛門の「出軍日記帳」の中に、人名簿があるが、その中、夫卒についてくわしく書いてあるので、次に記す。

(注) カッコ内の姓名は筆者挿入す。

中之内村

柳井谷	主取 (大村源六)	大角門	源 六
牧村	主取 (鎌田源右衛門)	徳重門	源右衛門
笠木村	夫 (金沢新右衛門)	金沢門	新右衛門
鍋村	夫 (永山善太郎)	下鍋門	善太郎
一梶ヶ野	夫 (川辺十兵衛)	梶ヶ野門	十兵衛
一右同所	夫 (八木金市)	松ヶ野門	金 市
一折生田代	夫 (榊原計佐五郎)	飯屋門	計佐五郎
一柳井谷	夫 (中村清左エ門)	中西門	清左衛門
一馬渡	夫 (竹下計佐助)	鶴門	計佐助

一牧村 夫(重久六右衛門) 徳重門 六右衛門

五拾町村

岡別府 主取(上別府仲右衛門) 上別府門 仲右衛門

菅牟田 主取(福留鹿右衛門) 福留門 鹿右衛門

浅井 夫(米沢源次兵衛) 園田門 源次兵衛

右同所 夫(八木助八) 吉永門 助 八

菅牟田 夫(上田清助) 上菅牟田門 清 助

新原 夫(満郷右エ門) 満 門 郷左衛門

岡別府 夫(豊永庄左門) 豊永門 庄左衛門

馬場 夫(小浜計佐五郎) 上馬場門 五次郎

飯田 夫(山下四郎左エ門) 大重 門四郎左衛門

浅井 夫(八木伝計佐) 笠松門 伝計佐

月野村

月野 夫(白浜助次郎) 市柴門 助次郎

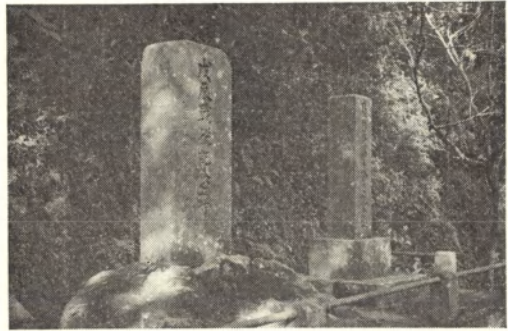
鮫島長十郎の父吉助は戊辰の役に出征したのであるが長十郎が父から聞いた話を次に記す。

鉄砲をかつき、弾を五十発腰につけ(当時の小銃弾は人さし指大ある)、長だらを下げて戦争をした。鳥羽伏見では三日ばかり戦うと、幕軍は逃げていった。それを追って越後長岡まで行った。そして九月十六日が打ちどめであった。いよいよ戦争も今日までという日、つつさ木

のかげで、銃身の掃除をしていた。矢ざおに布をつけて掃除するのだが、それがきしゅんで突然暴発右の親指をやられてしまった。これではいかんと思って逃げて谷に下りた。戦争中であるが敵の銃声はだんだん小さくなり、翌日調べて見ると、もう敵は逃げた後であった。吉助は手負いで後送された。彼地の元気な若者が七、八人ずつ出て、担架をかついで京都へ送ってくれた。しかしこの若者達がどんなことをするかも知れないし、ひょっとして谷間へでも投げこんだらそれまでだと思ふと随分恐ろしかったという。戦争中ならどこで死んだかも知かるが、こんなことも知れぬ所では、どうして死んだかも皆目わからぬことになる、それが恐ろしかったという(関川自治公民館発行の戊辰役関川口戦記抜すいは付録に記す)。

恒吉の出征

恒吉から戊辰の役に出征したのは、笠茂政徳(麓)、中丸兼栄(宮ヶ原)、篠原正九郎(麓)の三人であった。この三人の中、最初召集の来たのは、篠原であったが、事情で笠茂が代わって出征、その次にまた篠原に召集が来たが今度も代わりに中丸が出征した。三度篠原に召集が



戊辰戦役記念碑・戊辰戦役五十年祭記念碑

来たので、遂に篠原も出征することになり、夫卒に能見勘助（町）を連れて行った。

笠茂は越後の長岡から出羽直転戦し、中丸はまっすぐ出羽に向かって行って戦争に参加した。篠原は秋田で戦死し、夫卒の能見が遺骨を持ち

帰ったという。なお、中丸は宮ヶ原に大崎から養子に來た人であるが、先に出征していた笠茂と中丸は境左エ門という家で会ったが、その時笠茂が中丸に『お前が來なければ麓からは誰も來る人はなかったか』と言ったという。

なお、役後、篠原の遺族へ賞典禄八石、笠茂は賞典禄六石を受け、中丸は三石をもらったという。「恒吉村史」によると笠茂と中丸は同じく六石宛もらったことになった

ている。

戊辰戦役記念碑

八幡神社境内に戊辰役関係の碑があるので、次に碑文を掲げる。

戊辰戦役五拾年祭之記念碑

大正六年は明治戊辰の戦役を距ること実に五十年とす。其十一月旧藩主後嗣忠重公鹿兒島に於て、該役戦亡者の靈を祭らる、其鼎盛にして其礼渥し、予等亦参列の榮を辱ふす乃ち是を紀せむがため本碑を建て、以て郷閭及後昆に示し而して其皇室に忠にして公家を忘れざらむことを望む

大正八年五月二十四日

岩川旧領主伊勢健十郎（三十五歳）をはじめにして、従軍生存者、大津十七（八十二歳）外二十二名の名が連ねてある。

その隣に大正八年三月建てた「戊辰戦役記念碑」があるそれには従軍者の名が全部列記している。この碑には私領四番隊と刻んである。

第2章 軍 事

賞典禄処分未済に対する禄高整理公債証書下附願

鹿兒島藩から戊辰の役に出軍、鳥羽、伏見から奥羽北越まで転戦した功に対しては、明治二年から十五ヶ年間、賞典禄下賜の恩命があったが、これは城下士だけに支給されかつ秘密にしておき、城外兵は明治七年からはじめてその後十ヶ年間支給されることになった。そこで城外兵は城下士と同じく明治二年から六年迄五ヶ年の賞典禄処分未済に対する禄高整理公債証書の下附願を出すことになった。城外兵から見ると、城下士だけ優遇したという不平が高まってこの運動が起こされたものである。

大津十七の子廿の妻タメ所蔵の当時の関係書類を見るとこの運動の起こされたのは明治二十二年で、県下全般に亘った運動と思われる。岩川でも出軍者が連名で出願している。岩川で書類のよく整っているのは明治三十一年六月廿五日附の活版印刷の願書で、石高とそれに対する公債額等記入、連名で大蔵大臣伯爵井上馨宛に提出している。その中の一人、松元友次郎を例にすると、「一石高貳拾五石、但三等壹ヶ年五石、此公債額高百五拾円六拾六錢六厘」となっている。連名は松元友次郎、大津十七外八拾貳名とある。

「算計比較書」というものを見ると、一賞典禄壹ヶ年五石、総石高貳拾六石、内明治十二年公債下附済石高貳拾貳石七斗五升、誤謬不足石高參石貳斗五升、此公債額拾九円五拾八錢七厘」賞典禄に等級があり、二等壹ヶ年六石、三等壹ヶ年五石となっている。

運動には、川辺郡東南方村西鹿籠、今給黎正左門、同郡同村東鹿籠、長野彦俊、同郡知覧村郡、高城孫助を委任者として委託しており、三名は政府や議會に請願し、其筋へ運動した。契約証によると、運動に要した費用は、受託者が負担し、公債証書か金品の支給のあった時は、その五分を受託者が受け残りの五分を委託者が受け取るというのであった。この運動が成功した時は、受託者が受ける五分の中部を出軍者総代へ報酬として分配することや、不成功の際はこの約定は無効とすると決めている。

これらの運動は明治二十二年から起こされ、三十一年六月、四十二年九月、十一月に契約証を取交している。その後、書類がないので結果は判明していない。

第二節 台湾征伐・佐賀の乱

明治四年琉球人五十余名台湾に漂流して、生蕃に虐殺され、六年備中の漂流民が難にあったので、我が国は清国に交渉した。しかし清国は台湾は化外の民だといって交渉に応じないので、明治七年西郷従道を都督として、台湾征討が行われた。この征討に恒吉から後藤亮一、坂元の岡元四郎八が出征した。

征韓論に破れた参議江藤新平は、郷里佐賀に帰り、同志を糾合、征韓党を組織、島義男の憂国党と相合して、明治七年二月乱を起こしたが、三月平定、江藤は土佐で捕えられた。

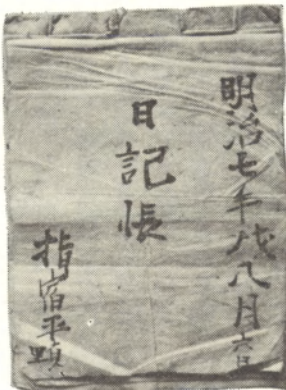
この乱に岩川から瀬戸口藤次郎（年二十二歳）が出征、二月十八日佐賀県で戦死した。

このことについて、岩川の瀬戸口彰氏所蔵瀬戸口家系図に、藤次郎戦死のことを記した後に、「岩川、五人御当有之候由ニ而旧隊長ハ松元彦八申付候」と記入ある。これによると、岩川では、五人出征して、その隊長は松元彦八であった。

恒吉から出征したのは、重村善太郎、岡元四郎八であった。

岡元四郎八の日記から関係分を抜すいする。

明治七戌二月十三日午後三時ニ佐賀出張被仰付十四日午前十時熊本出立（中略）肥前大川早ッへ着上陸直ニ籠城其夜明ケ五時ヨリ戦争相始直ニ戦死一人同拾六日朝八時門破リ其時ノ戦死一人大長（隊長と思われる）二人之手負外手負二人拾八日迄城内へ戦争朝八時頃城ヲ破リ久留米不中（府中か）申所へ引揚（中略）廿一日ヨリ又戦争相始同廿七日迄戦争同廿八日朝五時頃降参有也直ニハス池迄差越候所同廿九日城ニ乗込同卅日城ヨリ出（中略）三月八日同九日ニ熊本帰台（隊か）（中略）四月拾九日熊本出立高橋ヨリ川船ニテ一里半バカリヨリ直ニ蒸気船乗込同廿日拾二



従軍日記

時大島沖ヲ出帆長崎タノ六時浜ニ着直ニ上陸（中略）同五月二日蒸氣船乗込同三日ノ十一時出帆仕候所同十日外国台灣之國シミツ港着船上陸直ニ天下ハイ中ニ入同十八日石門口ヘ傭兵一人戦死五月廿一日午後二時ヨリ拾九大隊一番中隊右第□ノ四□之□軍曹一名兵士一名手負之事五月廿二日午前七時ヨリ十九第三番中隊石所ニ血罷節午後一時二十分ヨリ牡丹人石門口ヘ戦争之及此日戦死手負七名牡丹人甬（雇か）十三名取六月二日朝六時ヨリ竹社口ヨリ三番隊傭兵之六番小隊一小隊牡丹攻込ミ其日戦死三名手負二人午後五時頃ヨリ引揚其夜ハ石門ノ上ノ川中ニ一宿同三日朝八時頃ヨリ牡丹ニ攻込ミ本陣取同四日牡丹城下傭兵ヨリ火掛焼払イ同五日午後拾二時頃ヨリ石門ヘ着陣休息直ニ石門ヲ出立社城歸リ同六月十一日風港ニ出張同廿二日二龜山ニ歸台仕候同七月三日ニ石門ニ出張仕候同五日ニ龜山ニ歸台仕候又九月三日ニ風港モ相（有か）之候得共其時ニ私モ病氣ニテ（中略）十月三日二十九大隊之六人ニ二拾二番大隊ガ香川丸着船仕候台湾ヨリ十月八日午後四時三十分ニ出帆仕候同十二日夜十一時ニ長崎港ニ着船仕候（後略）

岡元は十月十八日入院廿三日退院し熊本に歸隊した。

第三節 西南の役

一 征韓論者の下野

明治六年になって、新政府は隣国朝鮮と国交を調整しようとして交渉をしたが、朝鮮は極度に排日的態度をとり、わが国の交渉に応じなかったので、その無礼を責めようとして朝鮮問題は閣議の重大問題として取り上げられ、征韓論が起こった。しかし朝議は、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文等の内政充実急務論派と、西郷隆盛、江藤新平、板垣退助、副島種臣、後藤象二郎等の征韓論者に分かれたが、後者は敗れて下野した。

征韓論に破れた西郷隆盛は、六年十月廿三日、辞表を提出数日後飄然として帰郷の途についた。当時陸軍少将、陸軍裁判所長であつた桐野利秋は、最も強硬に征韓論を主張し西郷に従つて辞表を出して帰郷した。続いて陸軍少将篠原国幹、少佐別府晋介、大尉辺見十郎太、河野主一郎等多くの人材が連袂帰郷した。

鹿児島では七年六月、旧厩跡に私学校が設立された。学校は二つに分れ、一つを銃隊学校と通称し、旧近衛歩

兵を收容し、篠原国幹が主宰し、生徒五、六百名であった。他の一つは砲隊学校といい、砲兵出身者を集め、村田新八が監督して、生徒は約二百名であった。私学校は本校の外に、鹿児島市内各方に限に分校が設けられ、後には諸郷にも夫々分校が順次設立された。私学校は西郷の県民間にある大きな人望に加えて、大山県会の積極的な支持の下に、その勢力を愈々県下に伸長した。そこで県下の区制整備にも、私学校関係者が多数区長、副区長に任用し、戸長学校長等も多く私学校関係者が選ばれ、県下の郷村の行政組織はほとんど私学派が掌握した。

この間、征韓論者による反乱は各地に次々に起こった。七年には江藤新平の佐賀の乱が起こった。わが岩川から瀬戸口藤次郎(二十二歳)が出征、肥前国で戦死した。九年には神風連の熊本の乱、旧筑前秋月藩士の秋月の乱、前原一誠の萩の乱などがあった。

二 西南の役

こうして急迫した世相の中に、十年二月、遂に西郷隆盛を擁して西南の役が起った。私学校側では隊位の編成をし、小隊、大隊など定め、大隊は五番まで編成され、

第一番大隊長篠原国幹、二番大隊長村田新八、三番大隊長永山弥一郎、四番大隊長桐野利秋、第五番大隊長池上四郎であった。二月十五日折から降り積んだ雪の中を、一、二番大隊が旧練兵場を出発、続いて十六日三、四番大隊、最後に十七日五番大隊と共に西郷隆盛も出発した。そして二月廿一日午後、一、二番隊が熊本の川尻に到着して戦闘が始まった。熊本城内には第十三聯隊があり、それに小倉から応援隊が半大隊入城し、警連隊六百を加えて総数約三千四百の兵力、熊本鎮台司令長官少将谷干城、参謀長中佐樺山資紀、参謀少佐児玉源太郎等が籠城した。西郷軍の兵力は七大隊約一万一千五百、砲兵二隊二百、輜重若干、軍夫千二百、合計一万三千といわれた。廿二日全軍川尻を出発して熊本に進入、熊本城を包囲して猛攻を加えた。

熊本城攻撃は二ヶ月に及んだが、陥落しない。そうしている中に官軍の応援が到着、植木、木葉の戦から、田原坂の戦になり、三月四日篠原国幹戦死、三月二十日田原坂は遂に陥ちた。田原坂の敗戦後薩軍は退却して、西郷は人吉に入り抗戦一ヶ月にして六月一日人吉陥落、西郷は宮崎に向った。桐野等も宮崎に入り、西郷の本拠となる。その頃鹿児島も四月末以後官軍支隊が占拠した。



戦死招魂標石（岩川）（戊辰・西南）

人吉から退却した薩軍は飯野、加久藤等で頑強に抵抗したが敗退、一方大口本道に退却、出水に破れた軍もあった。西郷軍は後鹿兒島に入って官軍と交戦した。六月末の両軍の態勢を見ると、官軍は、南は鹿兒島から鶴田、曾木、飯野附近、米良口、三田井を経て、北は日豊国境重岡に至る線に進み、大隅日向の二州を西側から包囲する形になった。西郷軍はその官軍の包囲の内側にあり、中島等は加治木方面に、辺見軍は横川方面に、新納等の軍は飯野、小林方面に、阿多の軍は米良地方に、その他三田井方面、熊田にも兵を配置、残された二州を維持しようとして相対峙した。

官軍は鹿兒島連絡後、都城を西郷軍の本拠と認め都城



招魂碑（貝ヶ塚）

攻撃に主力を注いだ。西方から都城に進んだ官軍の別働第三旅団は六月廿九日鹿兒島を發し、蒲生に入り、第二、第三兩旅団は七月一日横川麓に進んだ。薩軍の辺見隊は踊（今の牧園）に敗戦、そのあとに官軍が入った。辺見隊はその後高野に退き、七月十二日辺見は雷撃隊、干城隊を率いて高野を出發、財部街道赤迫に達した官軍と戦い、後敗れて退いた。それから辺見は庄内に入った。一方、相良長良軍は加治木から国分に退き、後恒吉に退いた。十三日薩軍は通山に退却した。七月十五日薩軍は村田新八の指揮の下に、通山本道、佳例川街道の両道から福山原の官軍を襲撃したが、官軍の防戦堅く破ることが出来ずまた通山に退き、これから行進隊は通山、

振武隊は末吉を本拠として官軍と相対した。

一方、都城方面を見ると、官軍別働第一旅団は六月廿九、廿の両日鹿兒島を出発して、海路高須に上陸し、一部は鹿屋、串良、郷池ノ原まで進撃して来た。

この報に接した志布志郷では、地元の兵二百人と末吉郷から八十人、福島郷から百人余の応援を得て、菱田川で迎え撃つことになり、台場を築いて待っていた。七月一日朝九時頃から官軍が進撃して来たので、ここで戦争が始まった。私学校軍は暫時の間防戦したが衆寡敵せず、それに銃器も少なかったので敗れて、内ノ倉、松山、福島方面へそれぞれ引き揚げていった。

こうして官軍は志布志を占領し、その他の部隊は花岡、新城、垂水、鹿屋、串良、高隈などに進駐、大隅半島の大部をその掌中に収め、その前衛は四日二川に、五日には百引に達した。

薩軍の方では、別府晋介は振武の二中隊と他に新しく募集した数隊を率いて、七月一日加治木を出発し、岩川に入った。ここで官軍は志布志に進出したという報があったので三日岩川を発して松山に行った。この時官軍は志布志から退いたという報せがあったので、松山に一泊し、四日岩川に引き返す途中、月野に進出して来た官軍

を襲って、岩川に戻って来た。

他方、国分の振武隊は、七月五日二川で官軍と戦い恒吉に還り、奇兵隊の二中隊は六日市成に向かい、洪坂で敗れ市成を失った。

都城の私学校軍では、官軍が百引、市成方面へ通ると聞き、これを撃滅しようとして、振武隊を主とし、これに奇兵隊が応援することとし、七月七日午後十時恒吉から私学校の振武隊長中島健彦、同監軍貴島清は、振武隊の十四ヶ中隊を率いて出発した。一書によると、七月八日百引、市成境界あたりで戦闘した私学校軍は恒吉に集まり、また小林地方から来た私学校兵とも出会いその数五千人と云われた。

こうして私学校軍は八日午前七時宮ノ原から浮牟田、中平房を潜行し、これから三隊に分かれ、一隊は本道を和泉ヶ野前段通りから、一隊は唐鎌街道から、他の一隊（三箇中隊）は和泉ヶ野尻を下り、土取の東平を通り、坂下に出て旧道を堂籠に出て、福留背戸を過ぎ万太郎の中途墓地で三隊に分かれ、一番隊は本田氏宅上兵の官壘へ、二番隊は新基地に上り茶屋ノ元の官壘へ、三番隊は林の平山氏の杉山側を上って茶屋ノ元へ突入し、発砲せずにはたちまち三壘を占領した。官軍では西北の城山高峰

の山頂で防戦に努めたが、遂に支えきれなかった。その時官軍二川の一つ中隊は百引に来て、第七十一郷校の庭で、ちょうど中食をしようとしていたが、不意に私学校軍が襲撃したので、直ちに散開して防戦したが、あまりに急のことであつたので狼狽し、それに私学校軍が官軍の背面に迂回し城山から瞰射したので、官軍は敗れ、兵を収めて市城へ逃げようとしたが、振武隊に攻められてはばまれ、二川へ向けて逃げ去つた。この戦いで百引における戦利品は、金貨一六四八円、大砲二門、小銃四十八挺、弾薬小銃三千発、毛布三三〇枚、外套二二六着、衣袴二八八着、糧食一〇〇苞であつた。

この戦いで私学校軍は前記のように凡そ五千人であつたが、百引にいた官軍は凡そ千三百人で、私学校軍が圧倒的に多く官軍は大敗した。官軍は麓の馬場に戦死していた者二十七人、その外山野に戦死した者が二百余人あつたという。私学校軍の戦死者は十名で、恒吉に仮埋葬した。

大崎郷菱田村に宿陣していた官軍が、七月十日月野下岡に來襲したので、振武隊はこれと戦い散々に破つた。官軍は鹿屋方面へ敗走した。

十一日(旧六月一日)には、私学校軍は恒吉から、官

軍は大崎から出て、野方村荒佐野中村などで会戦したが私学校軍は破れ、戦死者五名を恒吉に仮埋葬した。翌十二日私学校兵は大崎岩川方面に向かって出発した。十二日から十三日まで志布志へ振武隊二千人余が入り込んで大混雑したが、十五日には庄内へ向けて出発した。

この間、七月八日から十一日までに百引並びに大崎にて戦死、恒吉に仮埋葬した私学校兵戦死者の姓名は次のとおりである。

振武二番中隊半隊長鹿兒島土族黒田直次郎、振武四番中隊押伍蒲生土族郷田伊兵衛、振武六番中隊兵士野尻土族弓削藤市郎、振武八番中隊兵士鹿兒島土族黒川直左衛門、奇兵十四番中隊兵士諸島郡高城土族津曲八郎左衛門、振武三番中隊兵士新城土族池田武弥二、振武十二番中隊兵士樋脇土族鬼塚啓蔵、振武救応隊二番小隊一番分隊押伍指宿土族竹ノ内与七郎、振武八番中隊兵士今和泉土族池田盛能以上七月八日百引で戦死、振武四番中隊兵士吉利土族鮫島喜三次、振武六番中隊兵士種子島土族日高吾妻(十八歳)、振武十三番中隊清水土族唐仁原助市(十八歳)、襲山土族有川戸右衛門、奇兵十四番中隊吉野土族時崎本次郎(十六歳)、以上七月十一日大崎にて戦死、この外姓名不明の者一名で合

計十五名

であった（これらの仮埋葬者は戦争平定後、その父兄親戚などが来て、遺骨を収拾し、それぞれの郷里に改葬したという。）。

こうして官軍は百引、市成で敗北し、九日戦線を縮めて大崎・荒佐野・二川の線に拠った。中島・貴島軍は大崎の官軍を襲い、後官軍を串良に走らしめた。薩軍もこの方面では優勢ではあったが、右翼方面の危急によって七月十三日末吉に退却した。

かくて官軍は西南の諸道から並進して都城に向い、七月廿日ごろの態勢では、第三旅団は田口、猪子石越方面に、第四旅団は福山地方に、別働第一旅団は市成、恒吉に、別働第三旅団は第三、第四両旅団の中間正部谷に在った。そこで十九、廿日の両日、山県、川村両参軍、大山、三浦両少将等国分に会して、都城進撃の部署を定め、第三旅団は庄内、別働第三旅団は財部、第四旅団は通山、別働第一旅団は岩川、末吉の薩軍を襲って都城に進入することとしたのである。そこで第四旅団右翼は七月廿二日笠木に、別働第一旅団は同日岩川麓、五十町、鍋村に進み、両旅団連絡を通じた。

薩軍では廿日奇兵隊の四中隊が庄内から末吉に増援し、廿二日末吉の振武隊、通山の行進隊はその守備地を交替し辺見は雷撃隊の三中隊を率いて高野から末吉に入った。七月廿三日辺見、相良は末吉にある雷撃、奇兵、行進、加治木等の諸隊十一中隊を挙げて、笠木、岩川、鍋村の官軍を攻め、交戦十数時間に及んだが、官軍左右両翼から反撃し辺見は目的を達せずして末吉に退いた。七月廿四日、官軍四箇旅団一斉に進撃し、別働第三旅団は財部の薩軍を破り午前十時先登は都城に突入した。別働第一旅団は払暁岩川を発し、前夜岩川から退却した辺見、相良の部隊の不意を衝き、激戦の後これを破った。七月廿三日から廿四日にかけては、末吉の丸山原、恒吉街道（笠木、鍋から末吉に通ずる道路）から末吉の麓で激戦があり、通山方面でも官軍の追撃戦があった。

七月廿四日別働第一旅団は、正午には都城に入り、第四旅団は通山を攻撃、中島健彦の率いる振武隊を破って十一時都城に入った。最左翼第三旅団はまず平原の敵を破り、庄内に進み、防守の堀与八郎指揮の雷撃、干城、正義、協同等の混合部隊を撃破して午前六時占領、十一時都城に達したが、退いて庄内に拠った。

都城守備の薩軍総指揮者は村田新八で、官軍が都城近

傍に集結するのを待って決戦の予定であったが、官軍の進撃が予想外に速かったため、陣容を整備して立ち直る余裕がなかった。都城には財部実秋等の都城隊が守備していたが、無銃隊であったので、抵抗する力もなく都城を放棄せざるを得なかった。都城で敗れた薩軍は学木、清武地方に集結したが、やがて七月三十一日宮崎も陥落、同日佐土原も占領された。都城陥落以後、薩軍は死傷、投降、行方不明等によって兵員は著しく減少し、一中隊の実数四、五十名を趕ゆるものは少なかったという。

これから西郷は延岡に退き、長井に集結、ここで最後の大決戦が展開されたが、衆寡敵せず、遂に敗れた。官軍は長井の西郷軍を包囲したので、西郷軍では諸将会議を開き統局突圍隊を編成、辺見十郎太、河野主一郎を前衛とし、西郷は桐野利秋、村田新八と共に中軍、中島健彦等が後衛となつて、夜十二時諸隊前後して出発、断崖絶壁の間を潜行、十八日夜明可愛嶽絶頂に達した。そして官軍の前衛を抜刀呼噪して突破し、野津、三好両少将わずかに身を以て逃れた程であったという。官軍は薩軍の本拠を陥れたが、西郷以下既に脱出後で大いに失望した。その後各地に転戦辛酸をなめて、九月一日鹿児島に

入った。西郷軍は最後の募兵をしたがそれも意の如くならず、城山に籠城した。九月廿四日午前四時官軍の総攻撃が始まり、西郷以下自刃あるいは戦死した。こうして西南の役は終わった。時に午前七時であったという。

薩軍の当初の出軍は一万三千であったが、後から徴募したものを加えると総計三万以上と言われ、官軍の総兵力は六万に近かったという。

三 戦役と郷土

上諏訪の古老鮫島長十郎氏の西南役に関する話を次に記す。

福山の坂を官軍がのぼったという情報が入ると、一週間の前から家の戸板を外し、谷のひらの所に屋根をさしかけて雨を避け、馬牛もそこへ連れていった。そして粟植の時季であったので、その飯小屋から粟植に出かけていった。子供であった鮫島氏は「象ヶ迫ン谷」という所であった。この辺りはたいいていこのように、それぞれかくれ場所を見つけて避難していった。

それはまた、戊辰の役の時、岩川郷土が戦った奥州仙台の兵隊が、今度はその仇討ちに来るそうだという噂が

とんで、余計人心が動揺し、皆恐ろしがって、逃げだしたのである。

二、三日経つと、野方の方に銃声がした。翌朝八時頃には官軍が荒川に来了。その前に私学校軍は末吉に行っていたが、私学校軍は夜中に退却して行ったらしく、わからないほどであった。官軍は月野から、恒吉炭床から、笠木から二重堀からと丁度指を並べたように数隊にわかれて進撃して来た。この進撃隊形は、横からの襲撃を避けるためであったという。

しかし私学校軍は末吉の阪口の上と笠木の谷向うの台地に待ちうけていた。そこで岩川の町の上と阪口の上とそれから鍋笠木で戦争が始まった。二重堀の方は私学校軍がいなかったので戦争はなかった。阪口の上の戦争では、松山の飯盛岳から大砲で打ちかけた。飯盛岳に白い煙があった。その時町の岡留店の二階によか人が上っていて、どちらの弾かわからぬがうたれたということであった。

この戦争は夏であった。逃げる私学校軍が民家に火をつけるので、雑穀類を蔵した。馬屋の地べたを掘って吠えかくして、その上に土をかぶせた。近くに山林のある所は、立木に積みあげ、上屋を葺いた。私学校軍が逃げる時は民家に火を放った。兵隊の宿舎がないようにする

ためであった。

右の鮫島氏の話の中に、「奥州仙台の兵隊が、今度はその仇討ちに来るそうだ」という噂が飛んだことを話しているが、「日本残酷物語」第四部に次のような一節がある。「明治十年の西南戦役の際に、巡査として官軍兵に投じられた会津土族は、『戊辰の報讐、戊辰の報讐』と大声をあげて戦い、薩摩軍を驚かせたという。」

戊辰の役の際、薩藩は会津討伐の先頭に立ったが、中でも岩川は特に私領五番隊として奥州に転戦したので、戊辰の報讐という敵愾心は当然あったに違いない。

しかし右の戊辰の報讐は実際にここでも行われた。

市成の初代戸長であった吉水彦八は、戊辰の役に従軍、会津戦争に行った人であるが、西南役の時、私学校軍が百引から市成に破れ退いた時、官軍が吉水彦八の家の搜索をしたところ、象牙のソロバンが出て来た。このソロバンに丁度搜索をした官軍兵の父の名が彫りこんであった。そこで吉水が父を殺したのだということになり、官軍は吉水を引きたて、恒吉の脛切段に連れて行った。そして吉水を柙（ハゼ）の木にさかさにつり下げ、まず手の爪を指ごと切った。しかし吉水は涙を流さなかった。次に足の爪を足指ごと切った時、漸く涙を流し

た。そして目をえぐり、下から火を焚いて火あぶりにしたという。まことに惨酷なことであった。

吉水の豪胆さを見て、これ程の人物なら殺さねばよかったと官軍さえも言ったと伝えられている。

(脛切段は恒吉から宮ヶ原へ行く途中で、恒吉から行って県道の左手下方畑の中に、吉水の処刑された場所もわかつている。)

この話を鯨島利雄氏は次のように話した。

吉水彦八が処刑される時、官軍は最初彦八の耳を削ぎ、次いで鼻を削ぎ、それから両眼をえぐったが、彦八は一語も発しなかった。そこで官軍は怒って、彦八の盾間を突いた、その時はじめて一声を放った。官軍も彦八の豪胆さに驚き、「惜しい人物を殺してしまった」と惜しんだが、止むを得ず首をはねた。すると首はさっと飛んで、土手に墮みついたという。

「市成の士(さむらい)はこれだけの苦しみを受けたが、むでなことは言わず、土手にかみついた」と、利雄氏は母に話されたと述懐している。

吉水彦八の処刑について、市成の吉水家にある古文書には、次のとおり記してある。

死骸申請之願

市成郷士族

吉 水 彦 八

右 同

吉 水 勘 八

右此節暴挙に付賊徒に加り出軍仕候処七月十八日恒吉において戦死仕候趣承り候に付仮埋有之場所此節見当候間何卒御下渡被下度此段奉願上候以上

親類

奎 田 嘉 六

向 井 仲佐衛門

丑

八月八日

鹿兒島県令岩村通俊殿

市成

吉 水 彦 八

吉 水 勘 八

百引

鶴 田 清一郎

右当郷而戦死仮埋有之候間右骸骨右親族ヨリ其許江引取度望に候間別紙通相認早々此方江持参有之様親族江御達可給候也

但死骸者明日に而も引取相成差支無之書付を明後日に而も可上然候

丑

八月七日

恒吉戸長

後 藤 祐 之

市成
百引

戸長御中

追而右事件差図相請申訳有之此旨申候万一引取方無之候に付而者刑所江改埋候様差図候に付早々何分御しらせ可給候

右文中の丑八月七日は明治十年で八月七日であるから、七月十八日、戦死してから、そう長くは経っていないようである。恒吉で処刑された彦八等の遺骸を仮埋めしてある所がわかったので下渡の願いが出て、それに対して恒吉戸長から引取りに来るようという通達がなされたのであった。

ただ、右の文書を見ると、戦死したのは市成の吉水彦八、勘八、百引の鶴田清一郎三人になっているが、彦八のほか二人の事情はわからない。

久木山の鮫島利雄氏が祖父の鮫島金左衛門氏から聞いて記録した従軍記があるので、大要を次に記す。

金左衛門は当時十九歳、明治十年五月出征、鹿兒島の吉野に行った。隊名はコウシン隊、十三番隊、抜刀隊、隊長は末吉の村田甚之丞、分隊長は、岩川郷士族吉瀬嘉衛門であった。

最初の戦闘は竜ヶ水に滞陣中、官軍は軍艦から来て重富を破り、白銀坂を上り、我が軍を襲って来た。夜明になると段に上って、我が南方の陣地に銃火を浴びせ、前横から攻め立てた。そこで薩軍はいたたまれず退却し、上の段を逃げたものは多く戦死した。迫のまま退却した四、五人の者は無事であった。この時、谷川城之介が臀部に弾丸があったが奇蹟的にそれで負傷しなかった。それから西の方へずっと退却し、戦死者、負傷者が非常に多かった。この日昼間は快晴であったが、夜は大雨であった。この時我が隊の戦死者は郷田宮原計佐助、他に岩川の人一名あったようである。

その夜は野営をして翌朝は私学校軍が諸方から集まって大突撃を行い、我が隊も大いに進軍した。そこで午前十時頃になって官軍は総退却をした。我が軍は大喊声をあげて、逃げる敵を大いに破った。

それから、吉田、蒲生を経て加治木に行つて二、三日泊まった。夜は、鹿兒島湾の沖にいる官軍の軍艦から砲撃されたが、加治木の岡に落ちたようので、我が軍には損害はなかった。

しばらく福山方面に転戦した。加治木から小浜に一泊、

翌日浜之市小村に着き、早朝から新川越しに銃戦した。夜、官軍の方で銃声があったが、我が軍は応じなかった。小村に神社があったが、その辺りは一帯松林であった。その林中から川筋にかけて激戦したが、我が軍は敗色が濃厚であった。ここに一泊、翌朝敷根へ後退、亀割峠に番兵をした。ここに三、四泊した。

この間、官軍の追撃がゆるやかであったので、敷根の上の段に退却、佳例川、芝立、光神山に一泊、翌日は逆行して池田に進んだ所、前方の岡（帯野）から官軍が射撃して来た。我が軍は地形が悪い上に、兵力も少なく、所屬抜刀隊も四、五十人たらずであった。

我が隊の知人に別府の野田仲八という者が居った。この夜、野田が、「戦争は到底勝てないから、脱隊して帰ろう」と言った。自分は気は進まなかったが、知友の言うことであるから、遂に決心してここから脱隊して、梶ヶ野に行き、松の根元に野宿をし、それから東迫に行つて、朝、人家に出て食事をした。官軍の近づく心配がしたので、桂の上方に出て、入角の桜谷を下り、菅牟田の上村に出た。菅牟田に一泊していると、ちょうど恒吉方面から来た官軍であろう門の前を隊伍を組んで通過した。

この日、鍋で激戦があり、菅牟田で銃弾がしきりに飛んで来た。その翌日久木山に帰った。

なお、わが隊の夫卒は葛原梅ヶ迫市助、浅井善八などであった。△以上▽

この従軍記を読むと、敗軍の様子がよくわかるが、中でも脱隊をするところが興味深い。ここには服装については記していないが、もちろん武器は捨て、姿をかえて逃げていったに違いない。よく百姓の姿になって逃げたと言ふのを聞くのである。

久木山の神宮司万之進の従軍談を、同所の鮫島利雄氏が記録している大要を次に記す。

明治九年十二月廿八日岩川を出発した。御飯屋にあるミニヘル銃をとつて、岩川隊が編成された。隊長は天津十七であったが、出発直前病氣にかかり、佐々木勇輔が代わつて隊長となった。最初、宮崎へ行くはずで出発したが、途中から引き返すことになった。

二十八日出発した岩川隊は、その夜は福山に宿営、翌早朝鹿兒島へ向けて進発、陸路を歩いて、日没前に着いた。夜は徹夜で番兵に立った。

翌日は明治十年正月一日である。岩川隊は御殿金倉に集合、所屬隊もはつきりわからないまま出陣した。この日西郷南洲は全員に向かつて、「自分も一緒に出発しようと思ふがまだ所用があるので、皆には甚だ相すまないが明日出発する」と挨拶があった。

西田橋を渡つて進み、一日は市来港に泊まり、二日は阿久根泊まりであった。阿久根で所屬隊がはつきりと決ま

り、少切隊に編入された。隊長は御城下士曾木七之丞であった。三日川内の麓に宿陣、四日出水に宿陣、五日は夜通し行軍ヒメに泊まった。

戦争がはじまったのは、はっきりした日は覚えていないが、正中中で、熊本城を囲んだ。肥後三間町に正月一杯滞陣、家を出てから三十日振りに肥後ヒメに滞陣、一晚二町くらいのところに番兵をした。帰った時は、夜明けで寒く霜が降っていた。このころ、田原坂が破れたとの報せがあり、これから諸所に移動し、官軍の出没するところに出現した。

それから植木へ転戦、私学校生徒の戦死が多いが、銃撃戦を激しくし、退却はしない。この時岩川隊の佐々木勇輔、川崎与次郎、山下喜左衛門、牧之瀬新右衛門が戦死した。これから所属隊は更に改まって、少切三番隊となる。隊長は草牟田の人で梅田郷八という人であった。

その中、西郷殿から暇をもらった。その後川内附近の戦闘で負傷した。手打ち掛けから脇の下へ銃丸が通ったのだ都城へ来て一晩看護人が薬をつけてくれた。その後十八日振りに肉があがって、五月末に家へ帰った。

山口正太郎は三十一歳で西南役に出征した。その時弟の金四郎はまだ十三、四歳であったが、弟も「戦争に連れて行ってくれ」と兄にせがんだ。正太郎は「十五歳になっていないから連れて行けない」と言って残したという。正

太郎は植木で戦死したが、彼の髪の毛が赤い毛布に包まれて送られてきたそうである。

やがて薩軍は敗退していったが、笠木の山口助太郎（正太郎の父）方には官軍が三十人位宿泊することとなった。

そのため助太郎の妻は幼児を抱いて避難した。助太郎は子の金四郎を連れて妻の避難先に行く途中、川ノ谷を通る時、官軍の番兵が二名で手取城方面を警戒していた。助太郎はこれを見て、もし妻子がなければこの番兵をつき落として正太郎の仇を討ってやりたいものと思った。

陣の元（食鳥センター付近）には官軍の首を木の枝に吊り下げ、その前にガエに粟めしを入れて供えてあったという。

山口助右衛門（昭和六年亡）は西南役に出征し、辺見十郎太の隊に所属していた。田原坂の戦に参加し志布志の鉄山（田之浦あたりか？）の人と二人斥候に行行ったが、その中に味方の本隊との間に官軍が入りこみ、本隊に帰ることができず山中をさまよい歩いた。のち力尽きて官軍に降参したが、大分のお寺に送られた。そこが仮の収容所になっていて持ち物を調べられ、山口が持っていた十円のお金を取り上げてしまった。それでお寺に物売りがきたが何も買えなかった。

その中城山が陥落してから、もう帰ってもいいということであったが、旅費もなく歩いて帰った。笠木まで帰ってきたけれども、昼は気がひけたのであろうか、自分の家に

入らず夜になって帰ったという。

(山口敦行・山口静哉の両氏の話)

三坂秋儀の祖父は、当時十五歳の元服したばかりであったが、髪を総髪に結うて朱鞘をさして従軍したという。岩川小学校の上の方鍛冶屋付近は西南役のころ並松があり、その松に弾がこもっていた。この辺りは官軍と薩軍が烈しく戦ったところである。(三坂秋儀氏の話)

西南役に岩川から出征して戦死した人は次のとおりである(招魂標石による)。

明治十年戦死人員(註、カッコ内は年齢)

肥後於吉次戦死 佐々木高盛(31)、山下吉左エ門(43) 川

崎与十郎(36)、須娃勇吉(21)

肥後於植木戦死 大津直(23)、古藤仁次郎(24)、坂口淨

(18)、園田惣太郎(42)、谷川留次郎(34)、赤池郷兵衛

(29)、山口正太郎(31)、竹下直助(24) 有川喜次郎

(23)、有川寛次郎(32)、西矢七(32)、山口敦重(18)、

山下平右エ門(29)、小田直(26)

肥後於木留戦死 須田熊次郎(33)、山口甚周(29)

於山鹿戦死 田中覚右エ門(30)、松田□□(30)

於熊本戦死

加塩□□、吉田才□

於深川戦死 江口幸之進(22)

日向於延岡戦死 三坂篤(16)、原田嘉兵衛(21)

於小林戦死 野村武八(20)

薩摩於川上戦死 山口長祕(36)

於吉野戦死 宮原駒次郎(26)

大隅於田口戦死 竹下次郎助(35)

肥後於八代戦死 浜口郷兵衛(21)

日向於延岡戦死 小浜直次郎(25)

明治十三年庚辰二月建之

この戦役に郷土の岩川、恒吉、月野ともに出征した。恒吉では最初の軍の編成に入り二月出発したのは後藤祐道が一人であった。その後三月になって出発した者が二十六人であった。その後も召集に応じて追々出発した。恒吉の十年役従軍者は次のとおりである。

兵士

小田長武、小田勲、勝目政隆、宗像政包、川畑篤敬、長

池長慶、宗像氏榮、松田為敬、留岡実英、重村善太郎、岩

切伊兵衛、谷口一二、養田富之助、後藤祐道、重村篤嘉、

後藤亮一、曲田正道、坂元利孝、山下正誠、岩切種中、朝

倉行宝、曲田正常、領家重茂、鹿島国綱、中丸兼栄、中丸

兼則、野村照道、岩崎長幸、立山時行、上原通時、野村照

家、野村照誠、西惟行、野村照節、野田親美、太良木良安、指宿貞広、指宿貞英、岩下重幸、立山時晴、立山時明、立山時慶、肝付兼将、松下通房、泊家政、立山時宜、大河内則寿、領家綱貞、税所瑞穂、奴久妻兼州

夫卒

中津野金助、能見嘉次郎（後南牟礼ト改ム）、田ノ上乙助、福留次八

以上五十四人（松田文書による）。

その他、泊時行、泊直次郎、曲田喜之助、吉国祐定など確認できるが、敗戦ということもあり、あまり語られていない。

これらの従軍者は最初出発したものは、のち隊名を改め、振武、行進隊などになった。後から出発した者は、雷撃隊などになった。恒吉の従軍者は多くはこの雷撃隊に編入された。恒吉ではこのほかに直接戦役には従軍しないで、当時桜島に滞在していた旧藩主島津公に随従していた人たちがあった後藤祐之、川畑篤徳、中島義貫、笠茂政徳、永井利徳、山下正節、蓑田金秋、吉岡安高、上原政重等三十余人であった。この人たちの行動は何か理由があったはずと思つて調査したが、よく判らない。野上田愛五郎氏の話によると、これらの人たちは戦争に

いくより殿様についておればよいといつて桜島へ行ったという。右の中、笠茂政徳は、「戊辰役にいったから、十年役にはもう行かぬ」といって、西南役には従軍しなかったという。

勝目文書の中に当地方の状況を列記したものがあり、既述のものと重複する所もあるが、また異なる事項もあるので、そのまま記しておく。

明治十年兵乱ニ付恒吉郷諸記略

一、七月二日旧五月廿二日

高隈戦争官軍八百名程ニテ襲来、私学校兵百五拾名位ニテ戦争敗軍其日三拾名位市成迄引揚相成散々相成タル由。

一、七月四日旧五月廿四日

牛根市成境畔ニテ戦争官軍貳百名位私学兵六百名位にて私学兵勝利官軍ハ浜辺エ引去相成其日私学方より分捕針打四拾六挺有之たる由、私学兵戦死老人手負六人程有之手負人其日晚付当郷エ荷ひ送来岩川之様送越相成候当郷役出張所長江村有島袈裟太郎所ニ而候官軍ハ何程不相分候。

一、七月六日旧五月廿六日 百引市成境原にて戦争私学兵五小队にて戦ひ有之候処相敗れ私学兵当恒吉迄引揚相成候事

一、七月八日旧五月廿八日 百引市成境原ニ而戦争私学兵恒吉江引揚之勢又小林表より当恒吉郷へ繰込之勢都合五千

名程ニ相成官軍千三百名程にて戦争有之候処私学兵勝利にて官軍百引麓之馬場江戦死式拾七名位其外山島等に戦死数不知式百名余と云、分捕品大砲式挺其他彈藥諸品数多分捕相成、私学兵戦死八名、当郷之荷ひ来候に付当郷之埋葬相成候跡以て式名送来候事

一、所役出張所吉村市左衛門所江引直候事

一、同十一日旧六月一日 官軍大崎江屯集私学兵当郷より出張相成大崎野方村荒佐野井中村辺戦争同所麓方戦争二手に分り有之野方戦争私学兵相敗れ勢引揚相成麓方ハ勝利ニ而此戦争戦死五名当郷江送来り埋葬相成候事

一、所役出張出中原貞徳所江引直候事

一、同十二日旧六月二日 当郷江在陣之私学軍勢都て大崎之様向け戦争有之勝利之由手負人等志布志、月野村通行にて岩川より都塚之様送越相成たる由、十二日迄にて当恒吉郷江入込み私学軍勢ハ都て大崎之様発足相成候事

一、同十三日旧六月三日 私学軍勢は末吉之様引揚相成たる由

一、同十八日旧六月八日当郷正副戸長出張所は中原貞徳所にて役々諸人共罷居候処同日朝十時頃官軍砲声にて襲来候に付大谷村之様向け散々相弛^{ハツ}逃す。

一、同十九日旧六月九日帰麓候様山下正節桜島より帰りの折官より達を受其通達有之帰麓人数副戸長桑幡景本、後藤裕治、長崎正義、勝目政行、副戸長寄堀切篤良、大谷村菱ヶ迫江屯集正節同道帰麓途中貝ヶ塚より官軍多勢之中を申

分り帰麓輜重部平野不二彦殿宿陣川畑篤永所江参入届出候、所宿吉村市左衛門所江出張候且戸長遠矢良治は長江村柳原江相弛^{ハツ}、副戸長野上田光裕は上大谷江相弛候処当日帰麓無之後日帰麓届出相成候、此外役員其他之人員桜島滞在旧知事公江出勤之面々有之候。

一、官軍当郷江入込麓江三千名位、宮ヶ原江千名位、浦川内江式千名位其外神牟礼、飛佐江入込相成候。

一、同廿一日旧六月十一日 末吉岩川境笠木原にて戦争官軍は此方より出張、私学兵は末吉方より出張戦争有之双方戦死相応有之タル由

一、同廿四日 旧六月十四日迄当郷江入込み官軍追々岩川末吉之様向け発足相成候事

七月十八日になると、官軍が銃声を放ちながら来襲して来た。恒吉郷の役人たちは、先に私学校兵が駐屯していた間、私学校軍のために尽くしたので、官軍が来れば報復されることを心配した。そこで役人たちは郷内の各所にかくれて出なかった。しかし翌十九日になると、官軍は寛大な処置をとって郷役人に出て来るように達示したので、当時の戸長遠矢良治、副戸長桑幡景本、後藤祐治、長崎正義、勝目政行、野上田光祐、副戸長寄堀切篤良等は反省帰順の意を表した。そして官軍のために種々便宜を図った。

こうして官軍、薩軍の戦場になった所では、土地の住民は苦勞したらしく、官軍が先に入って、薩軍が後から入った郷では、その郷の役人たちは、私学校兵からさんざん拷問苛責され、酷しい苦難を受けたらしかった。しかし恒吉では官軍が後から入って来たので幸いであつた。

なお恒吉では私学校軍の本営は、笠茂政徳宅で隊長村田新八、別府晋介などがいた。笠茂家は野上田愛五郎氏宅で、当時子供であつたので、別府晋介がよく物をくれたことを覚えていと語った。その後官軍が入って来た時の本営は遠矢良治宅（元村長遠矢長氏方）で、北郷二郎等がいた。輻重部平野不二彦は川畑篤永宅にいた。

野上田愛五郎氏の話によると、恒吉の中原定徳という男は、十四歳で西南役に従軍して人の後を走り廻つたというこの男は生きて歸つた。

西南役で行方不明になつた某は、官軍に内通したというので殺されたらしい。

西南役の時は役場は元徳泉寺跡にあつたのを官軍が来て焼くかも知れぬというので長田神社に移した。町の戸長は遠矢良治で、鶏や物資を持って来いと官軍が命令したという。官軍は当時遠矢方に本部を置いていた。それ

で遠矢家では家族は柳原に避難した（遠矢長氏談）。当時官軍が地元の男女人夫を傭入れて、その人夫賃を支払つた受取証があるので記す。

証

金五拾銭

市成

芝

袈裟八

但廿日より廿一日迄老日ニ付式拾五錢ツツ

右正ニ奉請取候也

恒吉副戸長

勝目 政行 印

丑七月廿二日

第一旅団 輻重部出張 御中

証

金貳円

女夫

八名

但老人ニ付式拾五錢ツツ

賄方仕

右正ニ奉請取候也

恒吉副戸長

勝目 政行 印

丑七月廿二日

第一旅団 輻重部出張 御中

右によると官軍では男女同額で、女の賄方まで日傭賃を支払つていたことがわかる。

西南役が終つてから、私学校軍として従軍した罪の赦免を願つた勝目角兵衛、勝目新之亟の文書があるので、次に記す。

兼テ私学校へ入校不仕候得共、本年二月十五日西郷隆盛暴発ノ際於当戸長役所ニ内沙汰承リ銃刀携同シ三月廿七日出立於半山郷二九番大隊十番小隊長指宿郷ノ黒木竜助兵卒ニ編入候、同郷ヲ四月一日出発熊本県下人吉祝坂神之瀬於諸所ニ番兵仕四月十二日藤本ヨリ出兵八代内於古林鹿戦争艱瀬へ退キ於同所雷撃五番中隊ト改称隊長花岡郷ノ池田座四郎受持相成又シゾフ村横中上人吉上椅田大小場及当県下飯野小林高原高城於諸所戦争或ハ番兵仕終ニ高岡ヨリ脱走銃刀捨置本月二日帰郷即日当戸長へ相付帰順仕候如斯官軍ニ抗敵シ方向ヲ誤リ候段今更前非後悔自首仕候条相当ノ御処分奉仰候 以上

鹿児島県下第六十八大区小区大隅国嚙喰郡
恒吉長江村拾参番地政行長男

士族 勝 目 角兵衛

二十五年

右政行次男

勝 目 新之亟

二十三年

右之通相違無御座候 以上

十年八月十九日
少警視 綿貫吉直殿

右の放免願は日付が八月十九日であるからまだ戦争中である。こうして願いを出したが、許されないで、この後も放免願いを出して、漸く許されている。

前ノ文面
是レハ初ノ放免差出タル二人面ナリ、コレデハ採用ニナラヌ

出兵人員

勝 目 角兵衛
坂 元 軍 助
勝 目 新之亟
外 略ス

其方共儀方向ヲ誤リ官軍ニ抵抗スル科ニ依リ徴役三年可申付ノ処情法ヲ酌量シ其罪ヲ免ス

明治十年十月 都城巡査出張所ニ於テ巡査衆ヨリ右之通申被渡候事

再三差出候処漸ク採用ナリ其文面ハ委ク不覚候得共大抵左記ノ如ク書差出タル覚ナリ是レハ連名ニ書セス一人宛ノ姓名ニテ差出シタル覚也勝目角兵衛一人分私儀兼テ私学校へ入校不致候得共今般西郷隆盛暴発ノ際辺見十郎太、別府晋

介等ヨリ脅迫セラレ当郷ヲ三月廿七日出発於牛山郷二九番大隊十番小隊隊長黒木竜助兵卒ニ加入イタシ熊本県下諸所ニ於テ連戦後チ隊名五番中隊ト改称隊長池田彦四郎兵卒ト相成又同県下於諸所ニ如斯官軍ニ抗敵シ一時方向ヲ誤リ候段今更何共恐入候如此官軍ニ抗敵仕候儀ニ付前非後悔自首依テ前非後悔順仕候条相当ノ御処分奉仰候以上

西南役に恒吉から従軍した者の中、戦死したのは、肥後国桜馬場で戦死した立山時宜、岩川笠木で大河内則寿の兩名、領家綱貞、福留次八は生死不明。

税所瑞穂は肥後国大小場の戦に官軍の捕虜となり、その後日向国飯野で本隊に帰った。しかし私学校党の本営ではその挙動を疑って詰問し、身体検査をしたところ、官軍から委嘱された放火書を持っていたのを発見され、残酷な拷問を受けて殺されたといわれている。

重軽傷者は小田長武、重村善太郎、後藤祐道、重村篤嘉、坂元利孝、鹿島国綱、奴久妻兼修等であった。

小田勲、岩切伊兵衛は鹿児島吉野まで肥後国簞ノ瀬の戦に官軍の捕虜となり、熊本に護送されて牢獄に入れられたが、後郷里に帰された。

戦に敗れそのまま郷里に帰った従軍者も多かった。北地区の吉国祐定、竹迫喜助は戦いに敗れ、自宅の近く皆



皆越台場跡（土塁）

越の洞穴にかくれており、家族が食事を運んでいた。官軍の兵もそのことを知り、とがめないから出てくるように言ったが、出てこなかったとのことである。泊時行、直次郎兄弟も別の洞穴にしばらくかくれていたという。野村照節は戦後、都城の裁判所から呼び出されたが、自宅謹慎を言い渡され安心した。曲田喜之助は一二歳で叔父の肝付某と従軍、飢肥方面で行き倒れとなり、官軍に助けられ佳例川で釈放されて帰ったそうである。

西南役では月野下岡で烈しく戦いがあった。

岩元あたりでは、一般の人は前平のホキに隠れた。ある婦人はお産をしていたので、逃げる事が出来ず家に寝ていたが、そこへ官軍が来てダンゴをつくって喰べたという。その時洗濯盆を使って、粉を合わせたのがおかしかったという。

お寺の下の方で官軍が水浴をしていたらそれを見かけて国見が丘から大砲をうちかけたという。国見か丘には、今も塹壕が残っている。小学校の敷地をつくる時、今の用務員室の辺りから不発弾が出たという（岩永藤三氏談）。

これはおそらく大崎郷菱田村に宿陣していた官軍が、七月十日月野下岡に来たので、それを私学校の振武隊が攻撃して破った時の戦争であろう。

坂元の皆越には西南役の台場の跡が今も残っている。月野では西南役の戦場になった所、新留、桑之迫の間、広津田の上、下岡、菱田川、安楽川附近一帯はその遺跡である。

西南後の時、月野では官軍が来るというので、大鳥、小鳥の石の橋を取りはずして逃げたが、官軍はぐんぐん飛びこえてやって来たという。石の橋といっても小さい

ものであった。

月野は当時志布志郷の中であるので、志布志の情況を簡単に記す。

西南の役に志布志からは七回にわたって従軍した。第一回は明治十年二月十五日から十七日の間に、出水口、並びに大口に向かって出発総員肝付琢磨外九十名であった。第二回は三月二十八日肥後静雄外二十七人で大口に向かった。第三回は四月七日加藤沖左衛門外三十一名が加久藤口へ向かった。第四回は四月十四日上村昌盛外三十六人で、人吉並に福山へ向かった。第五回は五月三十一日東郷重郷外七十二人で、重富に向かった。第六回は六月二十五日河野通代外九十二人で、宮崎へ向かった。第七回は鹿屋兼照外八十六人で、二番小隊として宮崎へ向かった。

右従軍者の中、戦死三十一人、病気で帰った者三十七人、負傷者七十三人、官軍へ加入した者十七人で、これらは軍律で処罰された（志布志郷従軍者は「樟蔭」誌による）。

四 官軍墓地

岩川の馬場部落の上馬場の墓地に隣接して西南役の官

軍戦死者を葬った墓地がある。

墓石は全部で七十四基であるが、土地の人はほとんど多かったというが多くて八十基前後であったろう。

墓石が天草石で丁度「と石」によいというので、持って行ったものがあるといわれているが、これは墓標石ではなく台石のようである。現在将校三人の墓石はしっかりとそのまま残っているが、下士兵の墓石は三列に横に並んでいる。入口の作道にそった一列はもと現在の位置より右方にあったものを移したものである。この墓地入口にある個人の墓のところは昔は道路であった。

下士兵の墓石は以前はその周囲に玉石を敷き詰め、その外を台石が土留めとしてあったという。現在は棹石だけ立ち並んでいる。この土留石は上の方から土が流れこんで埋まっていることが後でわかった。

この墓地の入口の大きな二段墓石は、陸軍大尉山形照方の墓石、この墓地で一番上官である。所属は広島鎮台歩兵第十一聯隊第一大隊第四中隊第四中隊長で、出身は熊本県肥後国飽田郡京町、明治十年七月八日百引村で戦死している。この墓地の向こう個人墓地境近くにある二段墓石は、左方が陸軍少尉奥田政実で、所属は山形大尉と同じで、第一中隊所属である。出身は高知県土佐郡高

見で、七月十一日大崎村で戦死している。その右方の墓石は陸軍少尉試補林為隆、所属は名古屋鎮台歩兵第七聯隊第一大隊第二中隊、出身は愛知県尾張国春日井郡本南丸町、七月二十四日諸県郡都城で死んでいる。

この墓地に眠る兵士の所属は、遠くは仙台鎮台、近衛砲兵、近衛工兵、東京鎮台、名古屋鎮台、大阪鎮台、広島鎮台、それに別働隊第一旅団輜重部である。歩兵の外に砲兵、工兵、輜重部のあることがわかる。階級から言えば、前記大尉、少尉、少尉試補（見習士官であらう）の外に軍曹四、伍長四、兵卒四四、馭卒九、軍夫七、看病卒一、他に墓石欠損のため不明二がある。当時兵卒は一樣に兵卒となっており、馭卒というのは近衛砲兵第一大隊第一小隊付で、同隊にも兵卒があるので、軍馬の係らしい。軍夫は皆、別働隊第一旅団輜重部付で、墓石が著しく小さい。看病卒は名古屋鎮台第七聯隊第一大隊付で会計二等看病卒と記してある会計も受け持っていたものらしい。

戦死者の出身地は、東北の仙台、東京、名古屋、大阪、広島の名鎮台から来ているので、ほとんど全国に跨がっている。山形一、宮城二、福島三、秋田一、石川十二、静岡二、茨城二、埼玉一、千葉一、愛知二、岐阜

二、高知一、岡山三、堺県三、和歌山六、兵庫六、三重二、愛媛三、島根二、山口四、高知二、滋賀一、福岡一、熊本三である。この中堺県とあるのは当時堺に県が置かれたのであろう。士族十四、平民四六である。

戦死の場所月日は七月一日大崎菱田で一人、七月三日一人、七月六日肝属郡浜坂で一人、七月八日百引村三十六人、七月十一日大崎荒佐野で九人、七月十二日大崎仮宿で七人、七月二十三日岩川で四人、七月二十四日都城病院で一人その後は都城の病院で病死であるが、九月十七日一人、十月十二日一人、十月二十九日一人これは自殺とある。十一月三日一人、十一月二十一日一人、十一月二十二日一人となっている。

右によると当時の戦争の様子がわかるのであるが、百引の激戦が七月八日で、私学校兵五千くらい、官軍千三百くらいで、百引市成境原に戦争、私学校兵の勝利で、官軍の戦死が多かったのである。十一日は官軍は大崎へ集結、野方荒佐野辺りで私学校兵と戦い、私学校兵が敗れている。十二日は大崎で戦争、私学校兵勝利したが十三日ごろから私学校兵は末吉の方へ引き揚げ始め、十八、十九日ごろ官軍が大挙入りこみ廿一日は笠木原で戦争、双方戦死が多く、廿四日ごろまでに官軍が入りこん

で末吉の方へ向かっている。この戦歴と前記戦死者とを考え合せると、当時の戦況がうなずける。

官軍墓地の埋葬は、遠く大崎仮宿、野方荒佐野、百引の激戦地から死体を運び、一たん現在墓地手前の人家のあるあたりに大きな穴を掘り、そこに仮埋葬、その後現在の所へ移して埋葬したという。埋葬にあたっては火葬にしたという説もあるが、馬場部落の古老馬場精八氏は火葬ではなくそのまま埋葬したとはっきり言った。なお、都城の病院で死んだ人たちもここへ持って来て埋葬した。

当墓地はもと神官をしていた川崎篤義が経費をもらって墓地の管理をしていたころもあったらしいが、今は特に管理する人もなく、地元馬場部落の婦人会の人たちが、七夕と年の暮に清掃をしている程度である。

岩川の官軍墓地は当時のままに残されているが、土砂が流れこんだりして大分荒れていた。昭和四十二年七月、大隅町商工会青年部で顕彰することになり、墓石の周囲の置石も掘り出され、墓地の周囲にブロック塀をめぐらし、入口もコンクリートで固めた。そして献灯(寄贈)も二つ設けられた。商工会では七月二十三日夕方から慰霊祭も兼ねて夏祭り前夜祭を行った。

鹿児島県の祇園州に西南役の時の官軍墓地があった。ちょうど岩川の官軍墓地の墓石のような墓石が、沢山並列していた。祇園州の官軍墓地はその後昭和三十年になって国鉄管理部のアパート建築用地の必要もあったということで納骨堂にまとめることになり、墓地は整理されて、今は公園のようになっていいる。納骨堂には碑銘によると一二六二柱（この中、明治五年明治天皇巡幸の時の

病死者など含む）が納められ、時は昭和三十年五月三十日、鹿児島市長勝目清の時である。納骨堂の前に、青森県から建てた「宣力殉難報国諸士之」（下の字欠く）と刻んだ碑があり、西南役で戦死した元弘前藩士族の名が書き連ねてある。裏面に「丁丑役青森県人為戦於此地者建明治十一年八月」とある。

西南役官軍将兵戦病死者

列・番号	所 属 隊	階 級	戦病死月日	戦病死場所	氏 名	出 身 地	族 籍
正面	広島鎮台歩兵第十一聯隊 第一大隊第四中隊長	陸軍大尉	明治十年 七月 八日	百 引 村	山 形 照 方	熊本県肥後国飽田郡京町	士族
正面	第一中隊	少 尉	七月 十一日	大 崎 村	奥 田 政 実	高知県土佐国土佐郡高見	〃
正面	名古屋鎮台歩兵第七聯隊 第一大隊第二中隊	少尉試補	七月二十四日	都 城	林 為 隆	愛知県尾張国春日井郡本南丸町	〃
1-1	東京鎮台歩兵第二聯隊 第二大隊第一中隊	軍 曹	七月 一 日	大 崎 村	山 川 正 猛	茨城県常陸国茨城郡常磐村	〃
1-2	近衛工兵第一小隊	〃	七月 八 日	百 引 村	倉 満 治	石川県加賀国石川郡材木町二丁目	平民
1-3	名古屋鎮台歩兵第七聯隊 第一大隊第二中隊	〃	七月 十二日	大崎仮宿村	杉 坂 直 善	石川県加賀国石川郡長土堀一番町	士族

第2章 軍 事

1-14	1-13	1-12	1-11	1-10	1-9	1-8	1-7	1-6	1-5	1-4
近衛砲兵第一大隊 第一小隊	大坂鎮台歩兵第十聯隊 第一大隊第二中隊	近衛砲兵第一大隊 第一小隊	名古屋鎮台歩兵第四聯隊 第一大隊第二中隊	〃 第四中隊	仙台鎮台歩兵第四聯隊 第一大隊	近衛砲兵第一大隊 第一小隊	名古屋鎮台歩兵第七聯隊 第一大隊第二中隊	近衛砲兵第一大隊 第一小隊	名古屋鎮台歩兵第七聯隊 第一大隊第三中隊	大坂鎮台歩兵第十聯隊 第一大隊
馭卒	〃	〃	〃	〃	兵卒	〃	〃	〃	伍長	〃
〃	〃	七月 八日	七月二十三日	十一月三日	九月十七日	七月八日	七月十二日	〃	〃	七月八日
〃	〃	百引村	岩川村	〃	都城病院 死院	百引村	大崎仮宿村	百引村	市成八柴山	百引村
内堀長平	塩崎百藏	為井矢之助	後藤虎吉	鈴木己之助	阿部三助	野坂勝次	根塚亀次郎	堀井一之	長田与三郎	松本東五郎
堺県河内国石川郡大ヶ塚村	兵庫県淡路国第十二大区 佐野村	和歌山県紀伊国海部郡港村	愛知県尾張國中島郡小信 中島村	福島県磐城国菊多郡下川 村	秋田県第二大区八小区	石川県加賀国石川郡金沢 村	石川県越中国新川町富山 上り立町	石川県加賀国石川郡梅枝 町	石川県加賀国河北郡大菱 池村	静岡県駿河国志太郡桂島 村
〃	〃	〃	〃	〃	平民	士族	平民	士族	平民	〃

2-7	2-6	2-5	2-4	2-3	2-2	2-1	1-18	1-17	1-16	1-15
名古屋鎮台歩兵第七聯隊 第一大隊第二中隊	名古屋鎮台歩兵第六聯隊 第二大隊第三中隊	広島鎮台歩兵第十一聯隊 第一大隊第一中隊	〃 第七聯隊 第一大隊第三中隊	名古屋鎮台歩兵第六聯隊 第二大隊第四中隊	東京鎮台歩兵第二聯隊 第三大隊第三中隊	広島鎮台歩兵第十二聯隊 第一大隊第一中隊	近衛砲兵第一大隊 第一小隊	大阪鎮台歩兵第十聯隊 第一大隊第三中隊	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	兵卒
七月 六日	七月二十三日	七月 十一日	七月 八日	七月二十三日	七月 十一日	七月 十二日	〃	〃	〃	〃
肝属郡洪坂	岩 川 村	大 崎 村	市成八柴山	岩 川 村	大 崎 村	大崎仮宿村	〃	〃	〃	〃
宮 田 勝 藏	小野木 忠 作	平 野 登代吉	坂 下 忠 藏	大 橋 良 藏	鈴 木 桂次郎	田 村 弥五郎	上 田 定之助	塚 本 平 吉	諸 方 與 市	興 津 喜 市
石川県越中国砺波郡柴田 屋村	岐阜県美濃国第一大区第 十三小区細畑村	山口県周防国佐波郡高瀬 村	石川県越中国砺波郡三尾 村	静岡県遠江国城東郡大石 村	千葉県安房国朝比奈郡□ □郷村	愛媛県讃岐国鴨足郡西小 川村	兵庫県丹波国水上郡勅使 村	和歌山県紀伊国伊都郡丁 ノ町	石川県加賀国石川郡金沢 町	兵庫県淡路国三原郡浅井 村
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平民	士族	〃

第2章 軍 事

2-18	2-17	2-16	2-15	2-14	2-13	2-12	2-11	2-10	2-9	2-8
仙台鎮台歩兵第四聯隊 第一大隊第二中隊	近衛砲兵第一大隊 第一小隊	名古屋鎮台歩兵第六聯隊 第二大隊第四中隊	広島鎮台歩兵第一大隊 第四中隊	〃 第四中隊	仙台鎮台歩兵第四聯隊 第一大隊第二中隊	大阪鎮台歩兵第十聯隊 第一大隊第二中隊	〃	近衛砲兵第一大隊 第一小隊	〃	広島鎮台歩兵第十一聯隊 第一大隊第一中隊
〃	〃	〃	〃	〃	〃	兵卒	〃	馭卒	〃	兵卒
十一月二十二 日	〃	〃	七月 八日	十月 十二日	十月二十九日	〃	〃	七月 八日	〃	七月 十一日
都城病院 死	〃	〃	百 引	都城病院 死	都城ニ 殺テ	〃	〃	百 引 村	〃	大 崎 村
五十嵐 慶 治	貴 田 竹 造	倉 橋 房次郎	加 屋 葛 藏	大 橋 勘 治	渡 辺 豊 吉	飯 田 林 吉	梅 田 市 造	島 田 正 知	藤 原 政 市	板 野 庄 吉
山形県羽前国田川郡広野 新田村	堺県大和国山辺郡杉本村	岐阜県美濃国安八郡大垣 町	山口県周防国玖珂郡保津 村	福島県磐城国宇多郡坪田 村	福島県岩代国川沼郡堰沢 村	三重県伊勢国三重郡塩浜 村	兵庫県但馬国竹野郡綱野 村	岡山県備前国御野郡岡山 忍郎	島根県出雲国飯石郡給下 村	山口県周防国大島郡秋村
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平民	士族	〃	平民

3-11	3-10	3-9	3-8	3-7	3-6	3-5	3-4	3-3	3-2	3-1
近衛砲兵第一大隊 第一小隊	仙台鎮台歩兵第四聯隊 第一大隊第四中隊	広島鎮台歩兵第十二聯隊 第一大隊第一中隊	第一大隊付	名古屋鎮台歩兵第七聯隊 第一大隊第二中隊	〃	〃	近衛砲兵第一大隊 第一小隊	広島鎮台歩兵第十二聯隊 第一大隊第一中隊	第一大隊第一中隊 第十二聯隊	広島鎮台歩兵第十一聯隊 第一大隊第一中隊
馭卒	兵卒	兵卒	會計二等 看病卒	兵卒	馭卒	〃	〃	〃	〃	兵卒
七月 八日	十一月二十一日	七月 十二日	七月 八日	七月 十二日	〃	〃	七月 八日	七月 十二日	七月 十二日	七月 十一日
百 引	都城病院	大崎仮宿村	百 引	大崎仮宿村	〃	〃	百 引	永吉村 (大崎)	大崎仮宿村	大崎村
南保 安三郎	今野 清八	河野 庄吉	石橋 之篤	多胡 仁三郎	中野 清四郎	田村 正則	鍋谷 常吉	砂本 鉄治	高山 嘉奈次	佐野 与吉
石川県加賀国石川郡金沢	宮城県陸中国宮城郡仙台北八番町	高知県阿波国名東郡助任町	石川県加賀国石川郡金沢長町	石川県加賀国石川郡金沢田町	滋賀県近江国野洲郡堤村	和歌山県紀伊国名草郡和歌山	堺県大和国吉野郡西谷村	愛媛県伊予国風早郡中西外村	愛媛県伊予国越知郡鳥生村	岡山県備中国窪屋郡輕部村
〃	士族	平民	士族	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平民

第2章 軍 事

4-4	4-3	4-2	4-1	3-18	3-17	3-16	3-15	3-14	3-13	3-12
仙台鎮台歩兵第十一聯隊 第一大隊	広島鎮台歩兵第十一聯隊 第一大隊□中隊	近衛砲兵第一大隊 第一小隊	東京鎮台歩兵第二聯隊 第二大隊第一中隊	〃	近衛砲兵第一大隊 第一小隊	東京鎮台歩兵第二聯隊 第二大隊第一中隊	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	兵卒	馭卒	兵卒	〃	〃	兵卒	馭卒	兵卒
〃	七月 十一日	七月 八日	七月二十三日	七月 十一日	七月 八日	七月 三日	〃	〃	〃	〃
〃	大崎村	百引	鍋(岩川)村	荒佐野	百引	鹿屋病院 戦傷死院	〃	〃	〃	〃
花田仁助	石井友八	田村良直	吉葉長藏	玉置玄成	絹谷勘藏	会田留次郎	伊藤長之助	佐藤善太郎	千品留次郎	阪口虎松
宮城県□郡松江村	岡山県備中国窪屋郡子位 庄村	和歌山県紀伊海□郡和歌 山新通	茨城県第八大区小山村	和歌山県紀伊国日高郡熊 野村	島根県伯耆国日野郡矢部 村	埼玉県武蔵国埼玉郡萩島 村	三重県伊勢国三重郡西日 野村	兵庫県播磨国飾東郡西服 村	和歌山県紀伊国名草郡新 魚町	兵庫県摂津国武庫郡今北 村
	平民	士族	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平民

4-15	4-14	4-13	4-12	4-11	4-10	4-9	4-8	4-7	4-6	4-5
別働隊第一旅団	別働第一旅団 輜重部	別働隊第一旅団	別働第一旅団輜重部	第一中隊			近衛砲兵第一大隊 第一小隊		仙台鎮台歩兵第四聯隊 第一大隊第□中隊	広島鎮台 第一大隊
〃	〃	軍夫	軍夫		兵卒		馭卒	陸軍	〃	〃
八月二十三日 (七月か?)	〃	七月	七月				七月		十月	
鍋	〃	八月	八月	大		□	八月	諸	病都	諸
村	〃	百	百	崎		引	引	県	城病 死院	県
西村藤七	本田佐七	山本文次郎	宮寄門一	□村要吉	伊藤伊□	□幸吉	木村芳藏		伊藤栄五郎	
熊本県第二大区上立田村	熊本県肥後国第六大区岩原村	熊本県肥後国宇土郡宇土町	熊本県肥後国第五大区富綱村		□県長門国		高知県阿波国名東郡佐古楠小路	青森	宮城県第五大区□牧目村	山口
					平民		士族	〃	平民	

第2章 軍 事

残欠	4-23	4-22	4-21	4-20	4-19	4-18	4-17	4-16
〃 〃 〃 〃	〃 〃	別働隊	別働第一旅団	〃	〃	〃	別働隊第〇旅団	〃
			〃	〃	〃	〃	〃	〃
			輜重部	輜重部	第一旅団輜重部	〃	〃	輜重部
〃 〃	〃	軍夫				〃	〃	軍夫
〃 〃	七月	七月			〃	〃	七月	七月
	八日	八日					〇日	八日
	病	百				〃	〃	百
	死	引						引
他残欠二個 坂本? 山	佐々木	軍夫 九名之墓	水上 夫 七	吉	平	古 莊 直 七	宮 本 新 平	内 田 奎 次
								大 神 喜 平
熊本県肥後国	熊本県		〃 肥後国永村	〃 郡津屋崎村	〃 第六大区袋津村	村 熊本県肥後国第五大区永村	熊本県肥後国第五大区竹迫村	福岡県第三大区津屋村

第四節 日清戦争

明治廿七年朝鮮で東学党の乱が起こったが、朝鮮はこれを鎮圧することが出来なかったので、日本と清国は各兵を出して鎮定した。この時日本は清国と共に朝鮮の内政改革をしようと清国に提議したが、清国がきかぬので、遂に八月一日清国に宣戦を布告した。戦況は有利に進んで、満洲南部から遼東半島を占領、首都北京をおびやかすようになった。そこで清国は二十八年四月全権使節李鴻章を日本に派遣し、伊藤博文、陸奥宗光と交渉に当たり、下関条約を結んだ。これによって清国は朝鮮の独立を確認、遼東半島、台湾、澎湖島を我が国に割譲し、償金の支払、開港場の増加を決めた。しかしロシアは遼東半島を日本が領有することを喜ばず、フランス、ドイツと三国を以て我が国に遼東半島還付を迫り、政府は内外の形勢に鑑みてこの勧告に従った。

日清戦争に恒吉から従軍者は次の十三人である。

明治二十七年七月二十五日召集、歩兵少尉小田暢、歩兵

一等軍曹竹迫良次郎、砲兵二等軍曹領家為嘉、砲兵上等兵児島一二、歩兵一等卒山下伝袈裟、中丸兼良、徳留五郎右エ門、向井若右エ門、歩兵二等卒福元熊袈裟の九人。現役でそのまま従軍した者、歩兵特務曹長、能見肇芳、歩兵一等卒田中三太郎、騎兵一等卒篠原政盛、海軍一等水兵桑幡景敬（後、小田と改姓）の四人。

この中、清国大連湾旅順口、威海衛等の戦争に従軍したのは能見肇芳、竹迫良次郎、領家為嘉、田中三太郎、児島一二、山下伝袈裟、中丸兼良、桑幡景敬の八人。陸軍で戦功によって終身年金を賜った者は能見肇芳、竹迫良次郎。海軍では威海衛海戦水雷艇で戦功のあった桑幡景敬が、終身年金を賜った。

当時軍資金献納が行われたが、恒吉で献納した者は、金十二円川畑篤行、金十円宛能見勘右左エ門、本鍋市蔵、金三円宛中島義貫、遠矢良治、金貳円宛長池長慶、宗像政包、小田長麿、児玉長右エ門、桑幡景行、金一円三十銭西惟行、金一円宛福留助右エ門、森山矢早右エ門、本鍋次郎助、同人妻市来ナツ、川畑篤敬、吉満次兵衛、井上佐平次、上原政重、勝目政行、大村竜右エ門、村原道実、岩切種中、樋脇銀次郎、山下正節、戸高幸次郎、坂下六左エ門、神牟礼源太夫、後藤祐治、内山嘉右エ門、

第2章 軍 事

以上三十人であった。また二十七年九月十四日草鞋千五百七十三束、梅干七斗を村民総代留岡実元、大河内則芳から軍隊用として寄贈した。

恒吉では日清戦争中は新聞紙上その他戦勝の知らせを聞かずに、村民は戸毎に旭旗を掲げて祝い、また最寄りで小集会を開いて戦勝祝をした。

日清戦争の戦勝祝は各地で催されたが、恒吉では十八年六月一日貝ヶ塚段で盛大な祝捷会を挙行した。会場入口には祝捷会の三字の額を掲げた。この額は板の地に粟を貼付し、それに黒大豆で三字を表わしたものであった。会場中央には玉座を設け御真影を奉置し、会員が集合すると、整列して御真影前で一同敬礼をしてから、村長長池長慶が詔勅を奉読し、その後日清戦争終局の概要を述べ、それから村吏員、学校職員の祝詞演説があり、生徒児童の唱歌、最敬礼で式を終った。この日村内各部落から余興として棒踊、大鼓踊、手踊、角力、神舞等があった。また日清兵卒の仮装隊もあった。出会者は酒肴を携え来て、互いに献酬、歌う者、舞う者、およそ二千余人の出会者で賑わった。

この後、出征軍人も帰郷したので、八月一日になって凱旋軍人慰労会が髪仏ヒゲボツの前で挙行された。この日会場に

玉座を設け、御真影を奉置し、一同最敬礼の後、生徒児童が君ヶ代合唱、村長長池長慶が開会に軍人へ慰労の言葉を述べ坂元校三島訓導、大谷校樺山訓導、兵事会員総代小田長良等の祝詞があり、軍人へ贈呈品、賞状の授与があり、その後軍人総代小田暢の答詞があった。そして唱歌凱旋の辞で式を終った。それから酒宴に移り、中で歩兵一等軍曹竹迫良次郎の実戦談あり、出会者に多大の感動を与えた。かくて歓を尽くして午後五時解散した。当日出席した出征軍人は八人で、小田暢、竹迫良次郎、領家為嘉、児島一二、篠原政盛、中丸兼良、向井若右衛門、大河原吉右衛門であった。

日清戦役で岩川出身の戦病死者は次のとおりである（忠魂碑による）。

日清戦病死者

陸軍歩兵一等卒若松佐次郎、同松下治左衛門

日清戦争当時の郡役所は今の教育会館のところにあった郡役所に兵事係があり、召集令は熊本師団司令部から県へそれから郡役所へ来た。

岩川では元の農協の所から中之園までの間の青年が脚

夫に立ち、これが召集令を各村へ配って歩いた。召集は次から次に来て、前の脚夫が市成についた頃は、また後の脚夫が市成へ走るといった具合であった。脚夫は一時間に二里ずつ走るきまりで、向こうの役場の門口にいくと、「召集」と大きな声で呼ぶと、内部は大騒ぎが始まったものだった。夜になると、脚夫は弓張提灯を風に消えぬように用心して持ちながら走った。

日清戦争に勝った時は、町の入口に大国旗を交叉して祝った。祝賀会のあった覚えはない（鮫島長十郎氏談）。

月野から日清戦争に出征した人は十二名であった。戦死者はなかった。丸岡計左助は金鵒勲章をもらった。戦後、凱旋祝いをお寺で催したが、凱旋兵の気は荒く、祝宴が乱れた話が残っている（岩永弥兵衛氏談）。

第五節 日露戦争

明治三十年ごろの極東事情は、ロシアは満洲方面に、ドイツは山東省方面に、フランスは広州湾、英国は威海衛などについて、清国から特殊な権益を獲得した。こう

した外国の圧迫に対し、三十三年排外主義を唱える義和団の乱が起り、日本軍を主力とする各国連合軍はこれを鎮定した。これが北清事変である。

北清事変後、列国は清国から軍を撤退することになっていたが、ロシアは撤退どころかかえって南下政策を進めるので、我が国では英国と結んで、ロシアの進出を喰止めようとして、三十五年日英同盟を結び、ロシアはこれに対抗して、同年露仏同盟を結んだ。その後、わが政府はロシアに満洲撤兵を交渉したが、ロシアは応ぜず、かえって益々東亜の軍備を増強し韓国内にも兵を出すようになった。そこで日本は、三十七年二月ロシアに対し宣戦を布告した。戦争は陸軍海軍共に有利に進み、三十八年三月の奉天会戦、五月の日本海海戦の勝利で終わった。米国大統領ルーズベルトの調停によって、日本から全権外務大臣小村寿太郎等、ロシアは全権ウイッテ・ローゼンなど、アメリカのポーツマスに会して、九月条約を結んだ。これによって韓国におけるわが国の特権を認め、関東州の租借、長春以南の鉄道権、沿海州の漁業権、樺太の北緯五〇度以南を我が国に割譲した。

日露戦争で恒吉に動員召集が来たのは、三十七年二月六日午前三時五十分であった。当時の応召者は次の十三

人であった。

歩兵一等卒川崎篤二、谷口計佐右衛門、梨木甚太郎、高尾吉太郎、岩下善藏、田中三太郎、大河原吉右衛門、工兵一等卒中留權右衛門、第一補充植山銀次郎、第一補充兵歩兵柳寿平次、第一補充兵輜重輪卒上原新之丞、吉留末吉、能見常吉

その後予備後備第一国民で動員召集並びに補充召集に応じた者。

歩兵大尉久木村十郎次、中尉小田暢、少尉後藤重森、砲兵軍曹領家為嘉、歩兵軍曹竹迫良次郎、長江源九郎、歩兵伍長盛権兵衛、その他合わせて六十六名。

海軍では一等兵曹西田万太郎、三等兵曹乙川内若右衛門、雲雀田栄作、一等水兵西軍吉が応召した。

戦功のあった者はそれぞれ勲章年金をもらった。久木田十郎次は功四級年金五百円、小田暢は功五級年金三百円、長江源九郎は功六級年金二百円、吉留市助と田ノ上正ノ進は功七級年金百円を賜わった。その他将校下士官は勲六、七等に叙セラレ一時金三百円又は二百円を下賜され、兵卒にも勲六、七等に叙せられ、二百円、百五十円、百円、八十円、五十円、三十円など差があったが一

時金があった。

従軍者中戦死した者は、歩兵伍長盛権兵衛、一等卒上村与八、松崎次郎助、伊地知末太郎、新村喜右衛門、病死した者は、歩兵一等卒上村能右衛門、輜重輪卒上原新之丞、海軍一等兵曹西田万太郎は戦死した。

戦病死者は、官等級によって葬式費を下賜された外に特別賜金を賜った。盛権兵衛は金鵄勲章百円、特別賜金五百円、西田万太郎は金鵄勲章百円特別賜金八百円、松崎次郎助、上村与八、伊地知末太郎、新村喜之助は各々特別賜金四百五十円、上村能右衛門、上原新之丞は特別賜金二百円宛を賜った。その他年々家族扶助料を下賜された。



日清・日露忠魂碑（恒吉）

一般の人で勲等に叙せられた者は、村長小田長良勲七等青色桐葉章一時金五十円、元村長宗像政包勲八等白色桐葉章、助役中原貞徳勲八等瑞宝章、兵事主任書記小田景敬銀盃一組、医師中島精一は赤十字社に聘用せられ、従軍したので勲六等一時金百円を下賜された。

日露戦争従軍者は大方はもう故人になっているが、岩川町の尾中嘉次郎（明治15・3・14生）が健在であるので、当時の話を聞いた。（尾中氏はその後昭四二死去した）。

嘉次郎は当時二十四歳、兵役はくじはずれであったが、明治三十七年十二月四日、補充召集令状を受け、十二月十日熊本第二十三連隊に入隊した。

当時岩川から熊本に行くには、岩川から牧之原に出て国分へ行き、国分から肥薩線の汽車に乗り栗野まで行き、それから大口まで馬車、更に水俣まで馬車、それから三角へ船で行き、三角から熊本まで汽車で行った。

三ヶ月の訓練を受けて戦地へ送られた。二月三日門司港乗船、大連に上陸、沙河で本隊に加わった。六月五日師団師令部付通信手に配属された。このため実戦には出なかつた奉天会戦の時は後方にいたが、陥落と同時に奉天に入って二、三ヶ月居り、昌図まで行った時休戦にな

った。そして昌図と四平街の中間にある上満井かみまんせいで休戦条約協定が行われた。日本軍は福島安正少将田中義一少佐外で、ロシア側からは満州総司令官リネウイチ他馬車で三、四十人来た。日本軍とロシア軍との通信所が上満井に出来て、尾中はここで通信にあたった。通信は電話で、通訳が二名つきロシア語を日本語にして、総司令部へ通信した。

その後、凱旋することになり、三月廿一日上満井撤収、鉄嶺に引揚、四月三日大連から乗船門司に上陸、四月十日熊本に凱旋連隊本部の仕事をしていたが、同十六日除隊帰郷した。帰途は三角に出て、ここから船で水俣に来て、それから陸路を岩川まで歩いて翌十七日自宅に帰った。

岩川村主催の凱旋祝は早馬段（今の旭住宅のあるところ）で挙行され、余興が各部落からくり出されて、賑わった。中山嘉兵衛は使用人五十人位をひきつれ、借りものの騎兵の服装で馬に乗って乗りこんで来た。また中山嘉兵衛はこの凱旋祝とは別の日に、凱旋者を今の公園の所に招待した。「召集令」を受けた時の様子を「中内日記」にくわしく書いてるので、当時の様子を知るために次に掲げる。

明治三十七年二月五日

三更に至り法螺貝の声耳朶を裂くか如し。蹶然起き出づれば火事か火事にあらず、扱はと轟く胸を押さへ切らず飛んで役場のより大声竹迫君を訪へば直に曰く「召集召集」と。依て今更の如く吃驚狼狽役場に至り見れば既に村長助役青山君永井君竹迫君及び川崎巡查其他中崎君吉川殿その他多数の使丁等集まり居たりき、曰く駐在所へ電報已に四回来れり云々 暫くする所へ郡衙の使丁来れり「動員令下れり」と。役場吏員は受取るや否や直に封押し切て富岡十助、中崎源十「ア、スッパイヂヤスッパイヂヤ」と。之を聞き中崎君「チエイヨーチエイヨー俺に一ツ飲ませい」とて茶碗焼酎をグイと飲み干し飛したり。(以下略)



日清・日露忠魂碑（岩川）

明治三十七年二月六日、昨夜軍事召集を發す。岩川二十三名。日露事件迫る。

三月十一日、軍資金を納む。「三十錢六厘納む」

中内日記から――

「明治三十七年三月四日、此日軍資募集の件に付出張所に於て吟味に列席」

戦争中は、銃後村民は早起会をつくり、未明からホラ貝を吹いて働いた。当時新聞も少ないので戦勝があるた
びに役場の上の丘に大国旗をあげて村民に知らせた。旅順陥落の時は一番大きな祝いが行われ、下岡では提灯行列が行われた（岩永弥兵衛氏談）。

日露戦争中、軍資金として三十七年三月十日国庫債券募集があり、それに応じた者は次のとおりであつた。

四百円小畑篤行、三百五十円本鍋市左衛門、百五十円能見勘左衛門、百二十五円村長宗像、百円児玉長右衛門、七十五円小田景敬、宗像政包、五十円、川畑篤徳、遠矢良治、井ノ上佑平次、桑幡景行、和泉秀莢、樋脇銀次郎、同ハルギク、二十五円小川原精一、笹茂政謙、本鍋次郎助、同源次郎、大村竜右衛門、宮田六右衛門、同畠五郎、内山

永田日記から――

嘉石衛門、川畑篤敬、吉満源八、中島敏太郎、児島一二、
本鍋清次郎、山下正誠

その他総代にて五十円一名、二十五円二十三名、計二千六百円であった。

それから三十八年一月二日出征第二十三部隊へ毛布二十枚寄贈した。この費用は村内一戸一銭ずつ出しだったのであった。一月十六日には出征軍人祈禱のために、小田長武宅地で神舞があった。これにも村民は応分の寄附をした。七月義勇艦隊建設費として恒吉村へ三百五十円の割当あり、これに対し村では貧富の等差を以て出金した。

明治三十七年三月以後で、軍資金の国庫債券募集は、およそ四回に及んだ。第二回、第三回では応募者は少なかったが、第四回では村内でおよそ五千円の募集配当があった。

明治三十八年一月七日貝ヶ塚段で、旅順港陥落の祝勝会があった。式は村長の演説あってから余興に移り、太鼓踊二組、太鼓三味線を携えた部落もあり、村民は酒肴を持参して宴会を開いた。この費用は一戸当たり十銭の出金であった。

戦死者の葬式の際は、式場を設け緑門霊位安置所等を作り、会葬者は、県知事代理、郡長村吏、学校職員生徒、村会議員、区長、赤十字社員、在郷軍人、神官僧侶、警官其他村民であった。式は県知事代理その他の祭文弔詞礼拝で終った。葬式の途中は、大小の旗五六十旒から七八十を押立て、長い行列をつくった。

三十八年十二月、戦死者招魂碑建設費県村用として、一戸金七銭を出金した。

日露戦争中は、日清戦争当時のように、戦勝を聞く毎に村役場、学校はもちろん、往来の辻又は高地に長竿に大国旗を掲げ村民は戸毎に竹竿に国旗を掲げて祝意を表し、軍人の帰郷の際は、往来の辻又は入口等に凱旋門をたて、これに祝凱旋の三文字を記し、軍人を歓迎した。凱旋門のつくりは、木製あるいは杉葉でちょうど鳥居のようなものもあり、また緑門のようなものもあった。都会では四方門にして非常に美しいものもあった。

戦争中は出征軍人の貧困者家族へ扶助金として、村民等級で出金寄贈したことが数回あった。

明治三十九年五月二十五日貝ヶ塚段で、出征軍人戦没者の招魂祭並びに凱旋軍人祝賀会が行われた。会場には長竹竿頭に国旗を掲げ、四方に万国旗を張り、緑には粟

粒を貼りつけた祝凱旋三字の額と、米粒を貼りつけた甲忠魂三字の額を掲げ、少し高所に日露戦役戦没諸氏の霊の墓標、傍に位牌を置かれた。

まず招魂祭から行われ、神官僧侶の祭文読経、郡長村長の弔詞、戦死者遺族総代盛伝袈裟玉串を捧げ、郡長村長等の礼拝参列者一同礼拝で式を終った。

続いて祝賀会に移り、君ヶ代合唱の後郡長並に村長小田長良、兵事会員総代中原真徳、教員総代増利慶次郎等の祝詞、演説があり、学校の音楽、軍人総代後藤重森の謝詞、学校生徒児童の凱旋唱歌、最後に両陛下並に陸海軍万歳三唱を以て式を終った。其の後、宴会に入ったが、この間村内各地から棒踊、太鼓踊、手踊、神舞、擬兵隊、仮面組が繰り出され、花火も打ち揚げられた。

この日の出会者は郡村吏員、警官、神官僧侶、学校職員生徒児童、赤十字社員其他一般村民で、およそ四千人と言われた。会費は一般一戸当十二銭、方限一戸十三銭計二十五銭であった。

岩川の日露戦病死者

陸軍歩兵伍長海江田栄次郎、同上等兵山口愛熊、同野間彦吉、同一等兵、森山祐助、同上山与之助、同山口末五郎、輜重輸卒竹之下藏右衛門



日清・日露忠魂碑（月野）

月野村の従軍者

日露役 従軍者六十五人、戦病死者八人、殊勲者三人、

有勲者六十四人

この戦役に際し、村民は戦病死者の村葬、軍資金の献納、慰問袋発送、出征軍人家族の救助等奉公的活動をなす。

月野村の日露戦争の戦病死者は次のとおりである（忠魂碑による）。

陸軍歩兵上等兵 徳田徳市明治三十七年八月三十日於清国
首山堡戦死
同 和田新左エ門明治三十八年三月七日於清

国奉天省漢城堡戦死

陸軍歩兵一等卒 前野勇吉 明治三十七年八月三十一日於

清国首山堡戦死

陸軍砲兵上等兵 近衛利兵衛 明治三十九年四月十日於清

国遼陽第一関東陸軍病院遼陽分院病死

陸軍歩兵一等卒 中原与吉 明治三十八年四月三十日於台

北衛戌病院基隆分院病死

同 中馬勇之助 明治三十八年二月二十五日

於熊本陸軍予備病院病死

同 徳田計佐助 明治三十九年三月七日於凱

旋後自宅病死

陸軍驛重輪卒 吉村金助 明治三十八年十一月七日於清

国李家屯舎營病院病死

恒吉では明治四十四年一月十六日、日清口露出軍人員戦死者招魂碑を長江字貝ヶ塚段に建設した。その時丁丑の役戦死者招魂碑も貝ヶ塚段へ改めて建てた。そして同時に祭祀を行った（註、丁丑役招魂碑は恒吉村森林組合のある所にあった。）。

明治四十年三月七日県招魂社建設費として一戸金十五銭宛出金した。大正四年十一月十六日、貝ヶ塚段に日露戦役戦病死者忠魂碑建設された。建設費は百八十余円であつた。

あつた。

第六節 軍隊・在郷軍人会

都城連隊

明治四十二年十一月、歩兵第六十四連隊が都城へ移転することになり、当時朝鮮に行っていた郷土部隊（当地方出身も多かった）が帰って来た。

兵 事

「中内伝左エ門日記」に、次のような兵事関係の記録がある。

大正二年九月十二日岩川で簡閲点呼あり、点呼官の質問ありて後一同に訓話を行われ且つその後、に於て村出身者の身上に就き懇切なる注意があつた（月野村出身現役入隊者について各人の成績を発表している。）。

大正三年五月三日岩川校にて徴兵検査、月野から歩兵七名、輪卒六名各甲種合格した。

その節注意事項として「着物の柄に注意せしむべし」というのがある。当時は着物を着て検査を受けたが、着

物の柄で好ましくないものがあつたのであろう。

大正六年十一月廿三日鹿児島にて戊辰ノ役五十年祭典執行さる。月野村から中内伝左衛門、義川助役、本田種吉参列す。

「月野村史」より——入退営共に親族及び方限内の人を招待し、入営には岩川迄送り、退営にも岩川迄出迎えた。

月野村史から——

大正四年三月十日の陸軍記念日 十月十六日招魂祭に於て在郷軍人の会合あり、戦病死者の法事を行い、又講話等あり、数年前には在郷家人の頼母子講等ありしも今はなし、時々臨時の会合あり。

大正十四年三月発行「贈嶽郡案内」から——

師団の管区は熊本にある第六師団の管区に属し、都城に歩兵第六十四連隊があり、本郡は都城連隊区管轄に属す。海軍管区は佐世保鎮守府に属す。壮丁の検診状態は年を逐うて良くなりつつあり、大正十二年検査の成績は甲種百人中三七人・六六で、トラホーム患者百人中十二人花柳病患者は百人中僅に〇・四に過ぎない。

海軍志願兵は海軍思想の普及に伴って、志願者増加の傾向があつて、合格者も亦配当人員を充足している状況

である。

第一次世界大戦

大正に入つて、欧州では英、仏、露の三国協商と、独、オーストリア、伊の三国同盟とが対立していたが、遂に大正三年バルカンの一角から戦争が始まった。戦雲は欧州全土から世界に拡がった。交戦国は前記の外アメリカも参加し、日本も日英同盟の誼みで、大正三年八月ドイツに宣戦、山東省の膠州湾青島、ドイツの南洋群島を占領した。

この戦争には郷土からは出征者は少なかったようだが月野村から一名出征した。

在郷軍人会

「永田日記」から——

「明治四十年八月二十九日、午前十一時から在郷軍人会の演習を松田の上で開催した。出会者一二五名。午後三時から宴会があつた」

次項で述べる在郷軍人会の発足は、明治四十三年十一月三日であるが、この永田日記にある在郷軍人会は、それより数年前である。日露戦役後、町村では自発的に在

郷軍人会を結成したものであろう。

在郷軍人会は時の陸軍大臣寺内正毅が創立の任に当たり、伏見宮貞愛親王を初代総代に頂いて、明治四十三年十一月三日天長節の佳日に、中央から全国町村分会まで発足したこのころの会員は陸軍軍人だけであった。海軍がこれに加入し、協力提携することになったのは、大正三年十月二十七日であった。

昭和三年御大典の時、宮城前広場で観兵式が行われ、陛下の閲兵があつたが、これに全国の在郷軍人代表が参加した。

「永田日記」から―昭和四年三月二十四日朝、八木塚段に前田君在郷軍人会の杉山間伐に行く。

在郷軍人の組織は昭和十六年頃の岩川の情況は、岩川町分会長、和田重義（陸軍少尉）、副会長二名、中馬浅逸（伍長）、今村操（伍長）、そして各校区（岩川、笠木、菅牟田、折田）に校区班長（下士官）がいた。

分会長和田重義は大正十一年兵、台湾台南の歩兵第二連隊に入隊、累進して少尉に進んだ。昭和十二年中支へ渡り十三年負傷、十五年退役となった。岩川に帰り、十六年三月頃から岩川分会長になった。

在郷軍人会については記録も焼却して何にも残っていないので、歴代分会長もよくわからない。原田昇、（菅牟田）山下盛重（松田）、三坂篤（中園）、藤井武志（馬場）などがある。藤井武志は陸軍大尉、昭和十八年前後一年間ばかり分会長を勤めた。藤井は大正五年十二月熊本騎兵六連隊に入隊、満洲事変、支那事変に出征、累進して騎兵大尉（後には機甲兵）となった。

藤井分会長の時、郡の連合演習が行われた。各町村の在郷軍人が参加、南軍は志布志から、北軍も岩川辺りまで出て、八合原で遭遇戦を開いた。それから引き返して丸山原に露営して、払暁戦を行い、それで演習を終った。銃は青年学校の銃を使用した。夜間行軍をしたこともあった。

在郷軍人分会は毎年三月十日の陸軍記念日に岩川小学校講堂で総会を開催した。この総会では町長、町議、小学校長、婦人会長などの来賓が出席した。こうした会には司令部から時局、軍事講演があつた。講演者はたいてい司令部から大尉、少佐級の人が見えた。

当時簡閲点呼が毎年行われた。この点呼には司令官かその代理が点呼官とし出席し、それに下士官の曹長か軍曹がついていて、きびしい取扱いをした。

在郷軍人分会は山林を持っていた。岩川でも町から部

分林を持っていた。八反歩位で、杉林であった。しかしこの在郷軍人分会の山林は、戦争末期近くに売却された。三阪篤分会長の時であったようだ。

在郷軍人会は郡連合分会の組織があり、毎年春期に岩川で総会を開いた。中には志布志で開いたこともあったようだ。小平原に全員集合して、そこで総会を開いたこともあったが、小平原で集合後、市中行進をして、岩川小学校庭まで来て、そこで教練、分列式を行った。また講演を行うこともあった。

郡在郷軍人分会長は戦時中は中塚南兵衛（大崎）、平野清（市成）、沢厚二（末吉）などであった。

なお、和田重義は戦争末期になって、退役であったが、幹部不足のため、現役復帰の志願書を出せというところで、志願書を出して現役に復帰した。そして肝付郡高山町に行って、特設警備隊長となった。これは日常は農業をしながら、敵上陸の時、後方攪乱をはかり、身をもってあたる任務を持っていた。地区は鹿屋地区を除いて、東西串良、高山、内之浦、吾平、根占、大根占、垂水などであった。隊員三〇〇〇人であった。

この特設警備隊は贈嶽郡でも志布志町役場に本隊を置いて、隊員を各町村に置いていた。

（この項、和田重義氏と藤井武志氏の話による。）

昭和二十年九月二日、岩川町在郷軍人分会旗と書類などを焼却することになり、八幡神社の下、もと教育事務所所の建物の裏の処で穴を掘って焼却した。

第七節 満州事変以後、太平洋

戦争まで

一 満州事変

日本の満州政策は実力行使の段階に入り、昭和六年九月十八日奉天附近の柳条溝の満鉄線路爆破をきっかけに、日本は軍事行動を起こした。満州事変の始まりである。昭和七年になると、満州事変は発展して、この年始めには、日本は張学良を追出し、全満州を占領した。昭和七年満州国建国、九年帝政を布く。九年末にはワシントン海軍軍縮条約の破棄、十一年一月五大国海軍軍縮会議から脱退、二月二・二六事件、十一月二十五日、日独防共協定を締結した。

二 日中戦争から太平洋戦争へ

昭和十二年七月七日北京郊外の蘆溝橋事件を契機に日中戦争が始まった。

七月末、当地方の三十八歳の後備兵多数に召集が来て戦争に直面した衝動を町村民に与えた。この召集兵は浜島部隊に属し、中支の各地を転戦したが、部隊長も戦死した。十二月南京占領。十四年ノモンハン事件、十五年大政翼賛会創設、時代は新体制に入る。一月日米通商航海条約満期とともに破棄、十六年、十月東条英機首相となり、十二月八日遂に大東亜戦争に突入した。真珠湾攻撃、十七年一月マニラ占領、二月シンガポール占領、六月ミッドウェー海戦、八月ソロモン海戦、十八年日本軍ガダルカナル島撤退、五月山本五十六戦死、米軍アッツ島占領、十九年米軍サイパン島上陸、十月米軍レイテ島上陸、二十年一月米軍ルソン島上陸、二月米軍硫黄島上陸、三月米軍マニラ占領、四月米軍沖繩本島上陸、鈴木貫太郎内閣成立、八月広島、長崎に原子爆弾投下、ソ連対日宣戦、ポツダム宣言受諾、十五日終戦。

大体前記のような経過をもって、戦争に入り、戦争を

遂行、敗退して終戦になったのであるが、この間、郷土の若者の多くは召集を受けて戦場に馳せ、あるいは徴用をもって軍需工場に働き、銃後国民もまた勝つために苦闘をつづけた。

昭和二十年八月十五日終戦となったが、満州事変以来、太平洋戦争終戦までに、郷里からも数多くの若者が出征した。その人数については資料がないが、周知のようになことに数多くの人数である。戦局が逼迫すると、未教育補充兵でも四十五歳で召集を受けたものがあった。満州事変以来の各地区戦死者は次のとおりである。岩川町三八八名、恒吉村二五七名、月野村一九〇名（月野の場合は日露戦争以後一九八名の中、日露役戦死者八名を差し引いた）

坂元の墜落機

昭和十九年八月十四日坂元の上空で米機と日本機が交戦して、一機が墜落、乗員は落下傘で降りて来た。墜落機は川路山（須田木の中）、乗員は同名の川路山（二重堀の中）に降りた。これを見たこの地方の人たちは、米機が墜落したと思い、竹槍、鉞、日本刀、棒などを持って集まって来た。この時ほど坂元に人がたくさん集ったこ

とは前後を通じてない、と古老は語っている。それほど大騒ぎであつたらしい。

しかし墜落した飛行機は日本のもので、一人乗機であつた落下傘は畑の中に降りていた。当時葉丸仲之助は常会長、警防団坂元分団長をしていたので、その軍人を葉丸方に運んで来た。軍人は二十六歳の片山千彰少尉で負傷をしていた。軍人は山口市の人、当時の都城海軍航空基地気付イ一二七イ二七の部隊長片山千代蔵の息子であつた。片山少尉は三日位同家に居て、都城の病院へ移つた（葉丸仲之助氏談）。

三 岩川飛行場（八合原基地）

戦争が烈しくなつていくと、南九州の地域に飛行場が建設された。岩川飛行場もそのひとつで、八合原の台地が急速に地ならしされて飛行場になっていった。

昭和十八年のある日、月野村長蔵岡金之助宛に海軍施設部から極秘の公文書が届いた。それは八合原台地に海軍の重要な施設をしたい計画が進められていることを、村長だけに前もって連絡し協力を得たいというものであつた。それから一ヶ月も経たない中に、海軍施設部の技

術者が乗り込んで来て、地主たちや関係者の驚きを尻目に、測量を開始した。

年が明けて昭和十九年の初めになると、関係地主約三百名を岩川に集め、施設部幹部から大体の構想の説明があり、軍事施設のために土地売渡の要請があつた。地主や関係者では、挙国一致の大戦であり、勝つためにはとあるので、誰一人異議を言う者もなく、地価も示された通りで、売渡契約をした。そして五月頃、地鎮祭起工式が挙げられた。飛行場となる八合原台地の中央に、軍艦に形どつた高台が設けられ、関係の町村長（岩川町、月野村）施設部幹部が出席した。飛行場の面積はおよそ二〇〇ha、岩川飛行場と命名された。

飛行場建設に決定した八合原台地には、八合原部落約四〇戸が居住し、何よりこれらの人家の立退きをしなければならぬので、月野村長の協力で、それぞれ移転先の斡旋をし、家屋の取り壊し、運搬、立直しなど、村民総動員であつた。

この住民の移転に併行して、いよいよ土工が開始された。畑地にトロッコが敷かれ、老若男女が連日五、六百人が出て、突貫工事であつた。七、八月のころには、朝鮮の人たちも五百人ほど徴用されて従事した。滑走路

(砂利)着艦訓練所(コンクリート)司令室、発電所、兵舎等次々に急ピッチで整備され、掘り起こした土地には芝生を植えて、敵に探知されないように擬装された。

昭和二十年初頭から飛行機が一機、二機と飛来して、附近の森蔭や横穴式格納庫(壕)に納められ、兵員も増加して本格的飛行場の形を整えた。しかしこれらの施設は極秘なので、見学も許されず、内部の詳細は不明であった。滑走路には金網が敷かれて、飛行機は発着した。

コンクリートが間にあわなかったのである。この飛行場が本格的に戦闘に参加したのは、沖縄攻防戦が烈しくなり、南九州の基地から沖縄攻撃が始められた時であった。どのくらいの飛行機がここを飛び立ったか、極秘中の秘密なので知る由もなかったが、十数回、十数機編隊で、沖縄方面へ出撃するのが感知された。しかしこの飛行場は最後まで敵に探知されなかったようで、敵機の攻撃を受けることはなかった。そのため飛行場や附近の民家には全く被害はなかった。

敗戦とともにこの飛行場も大混乱に陥り、兵員は二、三日中に退散せよということで、莫大な兵器弾薬、被服、兵糧など散乱して目もあてられない状態になった。この間残務処理員が、若干残ってあと片づけに当たっ

た。

終戦後、飛行場の土地は海軍省から大蔵省に移管され、また民間に払い下げられた。八合原部落にも入植者が入植し、台地は再び農耕地にかえった(当時の月野村長蔵岡金之助氏の回顧による)。

月野青年学校の実習地が、八合原飛行場の真ん中にあった。飛行場では滑走路の外は一般に耕作をさせた。これは飛行場としては、普通の耕地に見せかけるためであった。青年学校の耕作地は畑五反歩くらい、作物は甘藷増産で、青年学校から下岡の坂をのぼって通った。

飛行場には掩蔽壕があり、その中に飛行場が誘導されていた。周囲には土盛りがしてあった。

そのころは毎朝といっていいほど、午前三時、四時になると薄暗い中の特攻機が飛行場から出発して行った。沖縄に向かったのがあった。これらの特攻機はもちろん帰っては来なかった(当時の月野青年学校校長坂元貞雄氏の談)。

昭和十八年の秋のある日、八合原に来て八合原の年間の風の方向、四季の変りと台風の関係などを調べて行っていた一団があった。後で聞くと軍関係の役人であったことがわかった。これが飛行場としての最初の調査であった

ことは言うまでもない。翌十九年四月になると、白ベニキ塗りで四五cm角、高さ三mの標識が建てられた。現地測量の基準である。五月七日になると、八合原の土地所有者は岩川の郡教育会館に集められ、ここで軍用地になることを言い渡された。そして用地所有者三〇〇人は土地売渡書類に捺印した。土地には個人所有の外に墓地も含んでいた。軍では八合原集会所を施設部事務所として整地にかかった。当時麦、菜種はまだ未熟であったが、食糧不足の当時であるから、麦は収穫することになり、鹿兒島市から青年師範学校の生徒の応援で、刈取り脱穀し、更に宅地の整地を急いだ。八合原部落では竹山、志柄、太田尾その他へ移転することになり、移転に関する委員には赤松、有馬祐康、大山峻が選ばれた。志柄牧入口に飯場が数棟建てられ、朝鮮の人たちが入った。部落の西端にはトロが敷かれた。その中八合原部落には六月二十日まで立ち退かない建物は焼き払うという通達があった。こうして家は移転、耕地はとられ、暇はなく、僅かに配給にたよって生活した。九月になったある日の午後四時頃、畑の中に飛行機が不時着した。これから飛行場建設は一段と奉仕を増加、松山尾野見、田ノ浦その他から芝を運搬、芝張りをし、整地にはコンクリー

トローラーを牛に引かせた。そして各町の奉仕団はいっぱいになって飛行場の完成を急いだ。

十月には人間魚雷一人乗りのトンボ機が着いた。格納庫の基礎掘りをしたが中止、掩蔽壕と誘導路が出来た。大迫の谷間の両側には、銃器、弾薬、食糧を貯蔵、防空壕掘りも始まった。十二月には施設隊が到着。三角兵舎、松山の水源から八合原に揚水施設、兵舎炊事場などが建った。このころ飛行場に竹製の模型飛行機が並べられたが、間もなく撤去された。

二十年の元旦、野方の上空方面で敵機の投下弾が見えた予科練の特攻機が静岡から来た。そしてこの飛行場から特攻機が飛び立った。時間はたいてい午前一時ごろ、飛行場では道の両側の木に白ベニキを塗り、夜でも道幅がわかるようにしてあり、そこを特攻機の搭乗員が自動車であつて、飛行機に乗った。後には飛行場には竹垣を巡らして牧場に化け、また近傍には甘藷を植えた。農兵隊も到着した。

米国のグラマンは上空を通つたが、一度も空襲は受けなかった。やはり敵には発見されなかったようであつた。

八月十三日、米ソが手を握つた十円札のビラが空から

ふりまかれた。

十五日重大ニュースの布令があった。

志布志に敵が上陸するというデマ、婦人子供を避難させよという役場からの通達が来てその準備をした。兵員は変装し食糧と衣服を背囊袋に詰めて帰って行った。列車も鈴成りであった。搭乗員は飛行場に集まり、一斉に郷里近くの飛行場に飛び去った（八合原、大山峻氏談）。

八合原基地

八合原基地に海軍一等飛行兵曹として戦時中入隊していた平松（当時名賀）光雄氏について、当時の状況を話してもらった。

岩川飛行場は八合原基地と言っていた。最初鹿屋航空隊の分遣隊の形で出来、二十年四月ごろから実際に基地として使用した。隊員は静岡県藤枝に航空隊の練成部隊があり、そこで練成を終えた兵が八合原に来了。そして人数がそろってから芙蓉部隊と名づけ、零式戦闘機と彗星艦上爆撃機の機種によって編成された。隊長は海軍少佐美濃部正であった。

この基地には南方基地で生き残った兵を再練成した優秀な人がいた。ここでは主として夜間の攻撃であったので、すべて計器飛行であった。

攻撃機は沖繩に向かって黎明と薄暮に出発した。毎日戦闘機、爆撃機合わせて大体十機くらい出て行った。戦闘機は零式で一人乗、普通戦闘機は戦闘するだけであるが、この場合は二百五十キロの爆弾を搭載していた。戦闘機でも爆撃が主目的で、爆撃がすめば機銃で戦闘をした。爆撃機の方は操縦と偵察二人乗りであった。戦場では単機行動であった。

芙蓉隊は特攻の命は受けていたが、当時沖繩が不利で、本土もあぶないという時であったので、沖繩攻撃は反復攻撃ということになっていた。沖繩を攻撃すると基地に帰りまた反復攻撃するのであった。しかし攻撃に出て実際に帰ってくるのは、よくて三分の二、悪い時は三分の一しか帰って来なかった。

またこの基地から索敵に出た。これは敵の潜水艦を見つける任務であった。索敵には六機くらいが出たが、各機は基地を中心に各扇形の範囲を索敵して帰ったので、相当広範囲に亘って索敵した。潜水艦がいると、海の色が変わっているか、油が流れており、また潜望鏡は白い波を長くひいているので、そのありがわかった。

平松一等兵曹は六回くらい出撃、中一回は沖繩攻撃に参加した。鹿児島が大空襲を受けた晩であった。平松兵

曹は索敵で、予備学生の中尉が操縦で沖繩に向かったが、途中でエンジンが故障で鹿屋飛行場へ引き返したことがあった。八合原から整備兵が鹿屋へ行って、三日くらいかかって修理して、八合原へ帰って来た。爆撃をする時は三千mの高度から五百mまで下って、ここで爆弾を投下して、機首をあげるのであるが、この時飛行機は二百mまで下って居て、そこで機首をあげることになる。この機のエンジンの故障は、この機首をあげるまでの力がなかったのだという。

八合原基地から出撃して帰って来なかった人は八十七名くらいであったという。終戦になる十日位前に、四国西条航空隊から、操縦練習機による特攻隊が約五十機来たが、間もなく終戦になって任務は果たさなかった。この特攻隊員はほんとうの特攻隊で敵中に突っ込んで自爆するのであった。

昭和二十年八月十五日、終戦はラジオですぐわかったが、上級航空隊から連絡があった。しかし基地ではデマだ、こんなデマに服従してはならないというものもあった。隊員は集合して飛行服を新しいものに着換え、飛行機は全機整備して爆弾を搭載して待機の姿勢をとった。こうしたことから三、四回も集合して、協議の結果、二

転三転して、沖繩に突込むことは相ならぬということに結着した。終戦の時、八合原基地には戦闘機約五十機、慧星艦爆機が約三十機、それに前記特攻隊の練習機が約五十機いた。終戦当時、八合原に居た搭乗員は、士官、下士官兵合わせておよそ一三〇名くらい（実用機）、他に四国西条航空隊から進出して来たものおよそ六〇名くらい。計およそ一九〇名位いた。八月十八日襲部隊長は全隊員を集めて、諸君に復員ではない休暇をやる、もし復帰命令が出たら直ちに帰って来いと達した。隊員は飛行機に乗って、その故郷に帰ることになり、飛び立って行った。平松兵曹は慧星二人乗りに高知と徳島の男と三人乗って、郷里四国の松茂という所にあった徳島海軍飛行場に着陸してそこから二里位歩いて徳島市の自宅に帰った。途中飛行服はいけないというので、普通の服に着がえた。八合原基地でそれぞれ故郷に帰ることになった時、平松兵曹のかねて同乗者菊谷広一中尉は、平松兵曹に君はどうするかというので、私は郷里に帰りますといった。あなたは問い返すと、今更故郷に帰れるかと中尉は言った。その後、菊谷中尉の父親から中尉について問合せがあり、更に美濃部少佐から同じ問合せがあったという。菊谷中尉の消息はその後判明しないそうだ。敵に

突っ込んでいったのか、帰る途中墜落したのか、皆目わからないという。

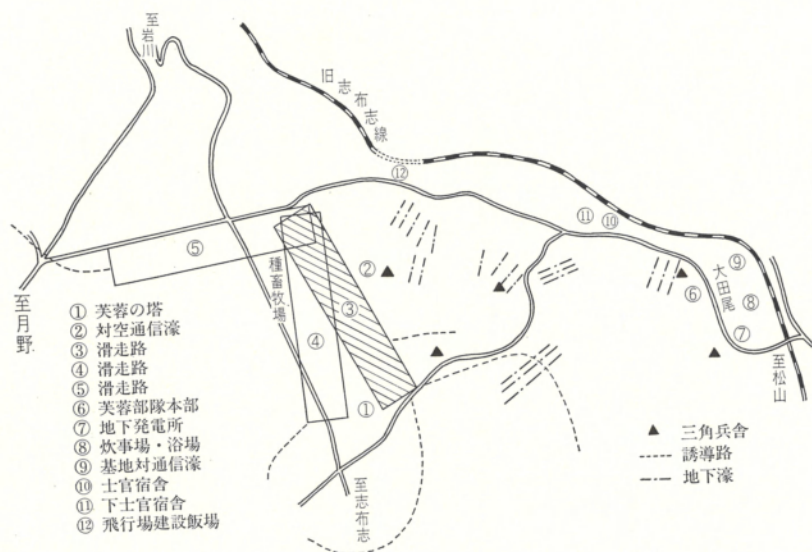
その後、平松兵曹はある日新聞を見ていると、芙蓉部隊は即時、八合原基地に復帰せよと出ていた。兵曹は基地を発つ時の隊長の言葉を思い出し、直ちに復帰することにした。しかしそのころは鉄道の切符が自由に買えなかったので、陸軍の憲兵隊に行つて証明書をもらつて切符を手に入れ、そして再び八合原に帰つて来た。八合原に帰つて見ると、隊長以下皆おり、復帰した者は五十名くらいであった。復員関係の人は残っていた。復帰組の仕事は、土中に爆弾が格護してあり、松山新橋には食糧が貯蔵してあったので、それを警備することであった。芙蓉部隊の残務整理本部は、岩川駅に近い現在天理教の家であった。下士官兵は太田尾に数軒家を借りて分宿した。

残務整理も片づいたころ、隊長が言うには、日本が今一番困っているのは食糧である。それで君たちはこの飛行場を耕して農業をやれということであった。こうして農業をやるうという事になったのは十四、五名いた。その中には兵学校出の中尉も二人いた。しかしこの人たちは一年たらずのうちに、殆んど帰つていった。

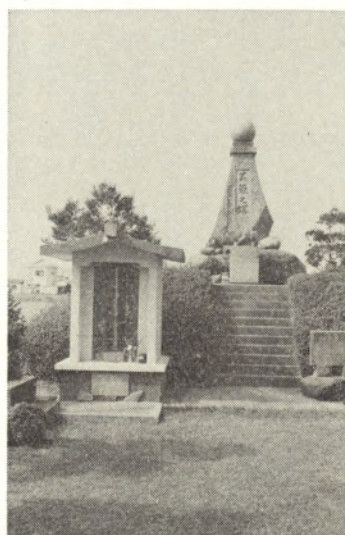
八合原基地の戦後処理

八合原の飛行場は戦後（二十年十一月頃）財務局（管財局）農林省の管轄になった。このころ、飛行場跡地を競馬場にしようという計画があつて、測量までしたが、当時食糧難の時代であつたから、増産に役立てる事になった。二十一年二月耕地、宅地の申込者が農協に集まつた。申込者は旧軍人、元の八合原住民で、地区を太田尾、八合原に二区に分けた。太田尾八戸（組合長池田）、八合原三六戸（組合長大山峻）で帰農組合を設立した。当時月野小脇に国営の営団事務所が設けられた。職員は土肥信八郎氏外二人で測量と区画づくりがなされた。芝原の仮配分で農業委員会の中に配分委員会（委員長松崎太市）が設置された。二十三年五月、県開拓課から牛込五頭分を借り、電気は郡元南国電氣に依頼して架設した。総工費八万二〇〇〇円で竣工した。このころ帰農組合を法人組織にした。この間三十六名のうち十三名が旧職にかえり、また体を損して後継者に譲つたものもあつた。三十四年五月開拓地改良事業の補助六分の五を受け、地元六分の一負担、総工費三七〇万円で八合原水道を完成した。三十八年四月国立種畜牧場が設置されることになり、八合原台地では耕地採草地約七五haが買収さ

第2章 軍 事



岩川飛行場見取図



芙蓉の塔

れたので、離農者を七名出した。これら離農者には特別
県単離農対策で一戸当たり三〇万円の離農資金を受け、
転職した。三十九年三月、八合原水道は水道法の適用と
今後の維持管理上大隅町水道に施設をそのまま移管換え
した。(以上八合原、大山峻氏談) 水道移管の三十九年
三月は水道課では三十九年十二月一日という。

四 芙蓉の塔

元芙蓉部隊の隊長元海軍少佐美濃部正(愛知県豊田市
出身)と、同部隊に所属していた郡内ただ一人の月野の平
松光雄(元農協職員)が中心になって、昭和四十五年一

月十三日、戦後二十五年目に元基地着艦訓練所跡地で、初めて慰霊祭が行われた。大阪、東京方面から元特攻隊員二〇名、盛田町長、永田議長を始め地元有志二十数名が参加して、式はしめやかに行われた。そして「芙蓉隊忠魂碑」と墨書した標柱を元飛行指揮所跡に建てた。また岩川基地の歴史を永遠に残すため記念碑を建立する運動を進めることを決議した。

その後忠魂碑を建てた場所が私有地であったので、元着艦訓練所跡に移転し、地元老人クラブが清掃に協力して維持されてきた。慰霊碑建立の第一回準備会は昭和五十二年六月に月野地区公民館で行われ、会長に井上徹志、事務局に平松光雄を選任した。募金目標を六百万円として、元隊員地元各種団体、個人に募金呼びかけ敷

地の決定等を行い同年八月起工式が行われた。慰霊碑は「芙蓉の塔」とし五十三年十一月十一日に除幕式が挙行された。遺族二十一名、元隊員四十三名、地元約二百名が参加して、しめやかに神式と仏式により行われた。その後十一月十一日を慰霊祭の日と定め、毎年行われている。

昭和六十年は戦後四十年目であり、特に全国から元隊員遺族約六十名、地元二百名が参加して慰霊祭が盛大に行われた。

戦没者

岩川飛行場から出撃した戦没者、官等級、出身地は次のとおりである。

川畑 栄一	少佐	石川県	鈴木 久蔵	大尉	東京都	大沢 袈裟芳	中尉	山梨県
田中 栄一	少佐	青森県	鈴木 昌康	大尉	横浜市	岡野 正章	中尉	武蔵野市
野田 貞記	少佐	佐世保市	竹田 正徳	大尉	愛知県	小菅 靖雄	中尉	舞鶴市
飯野 悦三	大尉	東京都	田中 正	大尉	東京都	佐藤 好	中尉	福岡県
大沼宗五郎	大尉	桐生市	玉田 民安	大尉	栃木市	三箇 三郎	中尉	旭川市
菊谷 宏	大尉	横須賀市	千々松普秀	大尉	山口県	清水 武明	中尉	埼玉県
黒川 武二	大尉	調布市	照沼 光二	大尉	茨城県	高橋 武治	中尉	浜田市
小林 大二	大尉	横須賀市	原 敏夫	大尉	栃木県	近田 良平	中尉	東京都
白井清一郎	大尉	岸和田市	甘利 洋司	中尉	長野県	平田 清	中尉	東大阪市

[illegible]

五 慰 靈 塔

本町の慰霊塔は岩川、恒吉、月野各地区に建設された。

岩川地区では昭和三十四年五月三十一日、八幡神社境内に建設された。建設委員長は市倉精二で経費は町補助金と寄附金を充てた。合祀者は満洲事変以降で、三八八名である。慰霊祭は毎年十月十四日行われる。午前中、慰霊塔の前で祭典を行い、午後は教育会館で宴席を設け鹿兒島から招いた演芸を遺族に見てもらったりした。

恒吉地区では昭和三十年一月十五日、大谷早馬段に建



慰 靈 塔（岩川）

設された。建設委員長は当時の恒吉村長伊集院忠雄で、経費は村の補助金及び寄附金を充てた。合祀者は第二次世界大戦の戦没者で、二百五十七名である。慰霊祭は毎年十月十八日。

月野の慰霊塔は昭和二十九年十月十六日、太田神社の境内に建設されている。建設委員長は当時の月野村長岩永藤三であった。経費は村費をもとに村民の浄財によった。村民の方ほとんど割付けの寄附であった。慰霊塔



慰 靈 塔（恒吉）

第2章 軍 事

田代正夫	川崎武雄	牧ノ瀬俊彦	本村秀夫	鮫島正夫	岩永正則
12・10・6	12・9・20	12・9・24	12・7・27	10・5・15	8・4・14
河北省	鎮	中華民国羅店	河北省	熱河省	河北省
東正雄	新川満規	山口充志	大津シゲル	川崎操	永野清範
13・7・19	13・7・18	13・7・14	13・6・24	12・12・4	12・11・7
安徽省	埼玉県	江西省	在郷	江蘇省	江蘇省
大山景道	鮫島鉄行	野元江道	園田嘉太郎	松山武夫	重久平
13・10・16	13・10・14	13・9・25	13・8・6	13・8・5	13・8・4
江西省	山	中華民国馬鞍	江西省	小倉陸軍病院	江西省

岩 川

(陸軍)

昭和以降の戦没者名

(地区別、陸海軍属・看護婦を含む)その他別を死亡年順に記載)



慰 霊 塔 (月野)

には日露戦争以後の戦争に出征戦死した英霊を祭った。日露戦争の招魂碑は神社境内に建ててあるが、その英霊もここに祭った。

なお、位牌は戦死の日時順に奉納してある。合祀者は一九八名である。慰霊祭は毎年十月十六日行われるが、遺族関係者が出席、祭りが終わったあと、月野中学校のブラスパンドの演奏、保育園児の遊戯、小中学校、消防団、一般青年の相撲大会などがあって賑わったものである。

第4編 近代・現代

花房静雄	13・10・19	江西省	新谷貞吉	16・6・14	満州興安省	山下弘志	19・2・8	鹿児島沖
黒木義則	13・10・20	中華民国大治	上ノ園政二	16・6・22	湖北省	池元利雄	19・2・8	鹿児島沖
湯田良則	13・10・29	県	木山 広	16・6・23	湖北省	山下義光	19・2・19	内太平洋上
吉留誠二	13・10・31	江西省	後迫清徳	16・9・7	小倉病院	三坂鉄則	19・2・19	内太平洋上
岩崎嘉一	13・11・12	中支野戦病院	柴田純清	17・1・4	ルソン島	川野清行	19・2・19	内太平洋上
		江西省兵站病	川崎 昇	17・5・8	東支那海海上	園田正雄	19・2・19	内太平洋上
		院	岩切忠夫	17・8・24	浙江省	鎌田岩男	19・2・22	ニューギニア
野村清一	13・12・8	漢口野戦病院	新川増雄	17・10・15	満州北安省	徳永静雄	19・3・10	タロキナ
原田鉄勝	14・3・22	江西省	川畚重盛	17・12・24	ニューギニア	林平三郎	19・3・10	ブーゲンビル
加塩範明	14・3・23	江西省			島	永田秀夫	19・3・12	タロキナ
長崎一二	14・3・29	江西省	太田六男	18・1・15	熊本健軍病院	山口義則	19・3・13	タロキナ
吉田新太郎	14・5・22	湖北省	山口重夫	18・3・1	広島陸軍病院	迫田静夫	19・3・13	タロキナ
田代友二郎	14・8・27	山西省	八木清次	18・8・3	ニューギニア	八木義満	19・3・17	タロキナ
岩重一夫	14・8・29	満蒙国境			島	中島正善	19・3・23	鹿児島療養所
八木直満	14・9・13	ノモンハン	谷川 司	18・9・20	昆明飛行場	野村静夫	19・3・24	タロキナ
永田源次郎	14・10・5	江西省	山下正友	18・9・25	西南太平洋上	高野国治	19・3・24	タロキナ
沢津橋秀二	14・12・14	湖北省	八木千偁	18・9・30	西南太平洋上	末広正道	19・3・24	タロキナ
入来勝二	15・2・2	広西省	又木康蔵	18・10・8	ルソン島沖	山田純幸	19・3・24	タロキナ
馬場貞吉	15・4・20	山西省	川井田芳弘	18・10・8	ルソン島沖	橋口虎雄	19・3・27	ミイトキーナ
川崎里次	15・7・5	ハルビン陸軍	立元義光	18・10・8	海上(認定)	園田義満	19・3・27	ブーゲンビル
		病院	内之牧秀男	18・11・7	熊本健軍病院			島
牧ノ瀬寅夫	15・8・20	小倉病院	牧ノ瀬信夫	18・12・23	南方	池之上武弘	19・3・30	ブーゲンビル
山口正紀	15・11・23	山西省	大山 実	19・2・8	鹿児島沖			島
松木良行	16・1・9	湖北省	桑原末吉	19・2・8	鹿児島沖	有島一夫	19・4・30	河南省

第2章 軍 事

井下国雄	19.5.23	ブーゲンビル	伊木義信	19.9.3	ニューギニア	青山良行	20.1.21	ニューギニア
上田義成	19.6.19	中支	神宮司留義	19.9.4	カイノ	山下益雄	20.1.31	湖西省
有川徹夫	19.6.29	鹿兒島県亀徳	漆間 繁	19.9.15	ブーゲンビル	神宮司良盛	20.2.11	比島クラーク
八木国吉	19.6.29	沖	山本善吉	19.9.16	ソロモン群島	東條保定	20.3.15	レイテ島
安藤 静	19.6.29	沖	笹川 平	19.9.22	広西省	坂口龍雄	20.3.15	セラム島
黒木清為	19.6.29	鹿兒島県亀徳	稲員鎌蔵	19.9.30	セレベス島	仲 義時	20.3.17	硫黄島方面
山下清則	19.7.1	沖	岩崎明良	19.10.5	ソロモン群島	永山文雄	20.3.17	硫黄島方面
上野政雄	19.7.14	アロバ	玉島篤美	19.10.8	香港沖	神野政夫	20.3.17	硫黄島方面
八木義雄	19.7.16	河南省	八木助盛	19.10.8	中支野戦病院	八木善三	20.3.17	硫黄島方面
岩崎作一	19.7.18	マリアナ	金沢省三	19.10.22	広西省	中村篤一	20.3.17	硫黄島方面
川床国盛	19.7.18	マリアナ	山下一盛	19.10.27	中支兵站病院	八木勝良	20.3.17	硫黄島方面
海江田義忠	19.7.29	湖南省	大保 光	19.10.31	フィリピン	岩永忠弘	20.3.17	硫黄島方面
上田時道	19.7.31	西南太平洋	市倉市積	19.10.26	ルソン島北方	新原一夫	20.3.17	硫黄島方面
坂元正二	19.8.4	マカッサル海	窪田智奈雄	19.11.9	ビルマ	山田愛蔵	20.3.17	硫黄島方面
田中国弘	19.8.4	峽付近	牧之瀬勝二	19.11.11	ニューギニア	花牟礼重	20.3.17	硫黄島方面
三坂正満	19.8.9	面	川添三郎	19.11.14	ニューギニア	森山信雄	20.3.17	硫黄島方面
新留光夫	19.8.24	ソロモン群島	東 伝	19.11.18	カイノ	中野国雄	20.3.17	硫黄島方面
花房若道	19.8.27	熊本陸軍病院	池之上信夫	19.12.3	カイノ	新川 光	20.3.17	硫黄島方面
		ソロモン群島	末広利道	19.12.6	広東省	細江貞男	20.3.25	沖繩
			上野重志	19.12.27	フィリピン方	東 重夫	20.3.30	ビルマ
			山下栄二	19.12.31	面	永野時森	20.4.3	ニューギニア
			笠松 寛	20.1.3	パラオ諸島	稲留義信	20.4.10	ルソン島
					ブーゲンビル	牧ノ瀬武雄	20.4.13	中支兵站病院
					島	坂口久夫	20.4.20	ルソン島

第4編 近代・現代

鳥丸良徳	20・4・24	ルソン島	中山景雄	20・8・9	ルソン島	肝付一雄	21・3・18	院
三坂篤雄	20・4・24	湖南省	山田清武	20・8・11	鳥栖			湖南省兵站病
牧之瀬高盛	20・5・6	ブーゲンビル	東條十三	20・8・11	レイテ島			院
大村義弘	20・5・12	島	坂口行夫	20・8・13	ミンダナオ島	和田才次	21・4・27	院
久永正人	20・5・27	沖繩周辺	市倉 敏	20・8・13	ミンダナオ島			院
伊作 進	20・6・3	ソロモン群島	小浜俊治	20・8・25	鹿児島陸軍病			院
井手ノ上式美	20・6・8	沖繩	東郷国夫	20・8・26	湖北省	(海軍)		
原田虎夫	20・6・9	広西省	篠原貞弘	20・8・27	台中陸軍病院	宮本正雄	5・10・16	八丈島北海上
東條 哲	20・6・10	ソロモン群島	入江 寛	20・8・28	フロレス島	青山 光	12・8・16	上海
坂口 卓	20・6・12	ルソン島陸軍病院	川辺信一	20・9・2	小倉病院	大保兼俊	15・6・6	遂寧飛行場南
大河原護	20・6・14	小倉病院	加塩弘志	20・9・4	湖南省	門之園佐至夫	16・9・8	方
後野保輔	20・6・17	南アングマン	馬場精一	20・9・26	パラオ兵站病			院
向田哲夫	20・6・30	フィリピン	花牟礼正雄	20・10・8	湖北省兵站病	牧之瀬久信	16・12・10	院
花牟礼清香	20・7・2	台北陸軍病院	野間静雄	20・10・8	院	金沢末吉	17・1・20	面
花牟礼源次	20・7・16	インドシナ	満 武夫	20・10・13	ブーゲンビル	別府 保	17・3・10	面
真方貞治	20・7・17	パラオ本島	伊勢忠夫	21・1・7	上海兵站病院			ニューギニア
鮫島義則	20・7・18	セブ島			北ボルネオ病	吉森正巳	17・6・5	東岸
川崎正美	20・7・20	ミンダナオ島	黒木重夫	21・2・12	院			ミッドウェイ
山本 清	20・7・20	広東省			スンパワ野戦	久永良則	17・6・5	海上
新川 清	20・7・22	ビルマ	荒武末熊	21・3・15	湖北省			ミッドウェイ
橋口政義	20・7・22	広西省	日高 弘	21・3・18	広西省兵站病	徳永義光	17・6・5	海上

第2章 軍 事

森山盛蔵	17・7・30	海上 ニューギニア	頼娃 享	18・11・2	方面 ラバウル上空	山下良行	19・8・18	面 フィリピン方
朝倉時盛	17・8・8	方面 ビスマルク群島	岩崎輝雄	18・11・20	ギルバート沖	永山 巖	19・8・22	面 フィリピン方
山下 直	17・8・17	西南太平洋方面	岩崎伊吉	18・11・25	南太平洋	竹下良治	19・9・24	面 フィリピン方
山下英二	17・9・1	北太平洋方面	村山正一	18・12・22	（戦病死） タラワ島	中馬 繁	19・9・27	面 大村海軍病院
関 守	17・10・18	佐世保海軍病院	春田義弘	19・1・25	南洋群島方面	堀 三吾	19・9・27	面 東支那海
桑原義雄	18・1・1	西南太平洋方面	原田国男	19・2・6	クエゼリン島	田中積郎	19・10・10	面 ボルネオ方面
別府 勝	18・1・17	南洋諸島	児丸澄夫	19・2・17	南洋群島	平原 平	19・10・23	面 南支那海方面
富岡慶次	18・3・3	西南太平洋	東條武良	19・2・18	小笠原諸島方	古川重雄	19・10・25	面 フィリピン方
幸田良教	18・3・3	ニューギニア	音堅信一	19・2・23	面	中野 忠	19・10・25	面 フィリピン方
池ノ上純俊	18・3・24	方面 ソロモン群島	森山秀夫	19・2・23	九州南東海上	岩永正雄	19・10・25	面 フィリピン方
黒木栄次	18・4・5	外南洋群島	竹下敬二	19・3・4	南洋群島方面	牧之瀬親夫	19・11・5	面 フィリピン方
永井七郎	18・7・15	ソロモン群島	久保田貞蔵	19・4・29	ソロモン群島	吉森 実	19・11・5	面 フィリピン方
花房武夫	18・7・20	ソロモン群島	柳 長切	19・6・10	南洋群島	肝付良志	19・11・11	面 フィリピン方
荒武秀熊	18・8・1	方面 ソロモン群島	黒木哲雄	19・6・19	トラック島付	山下国雄	19・11・25	面 フィリピン方
重久実光	18・8・21	方面 ニューギニア	西留利喜	19・7・8	近			
			岩崎一良	19・7・19	南洋群島方面			
			山本静男	19・8・18	本州南方海上			
					サイパン島			
					フィリピン方			
					テニアン島			
					フィリピン方			

第4編 近代・現代

新川利弥	20 3 14	本州南方海上	松ヶ野栄吉	20 6 12	朝鮮西方海上	恒吉 (陸軍)	福留博美	13 8 6	中支 上海陸軍病院
八木重雄	20 2 26	面 フィリピン方	小浜敏熊	20 6 10	面 フィリピン方			13 6 29	
長崎 清	20 2 26	マニラ方面	若松 進	20 5 31	沖繩周辺				
富重俊信	20 2 26	マニラ方面	重久 朴	20 5 22	奄美大島				
酒匂正巳	20 2 26	マニラ方面	岩崎利行	20 5 22	ラバウル島				
牧野早雄	20 2 16	本州南方海上	前田 光	20 5 6	横須賀海軍病院				
黒木 光	20 2 15	面 フィリピン方	長友吉雄	20 5 4	宇佐航空隊				
山下兼光	20 2 10	呉海軍病院	花房清則	20 4 29	ルソン島				
荒田正盛	20 2 9	ソロモン群島	有川光陽	20 4 24	フィリピン				
八木良一	20 2 2	面 フィリピン方	川野賢行	20 4 24	フィリピン				
岩永光則	20 1 12	仏印東北海上	津曲千切	20 4 23	フィリピン				
岡崎文義	20 1 12	南支那海方面	江口敏夫	20 4 23	フィリピン				
三坂 功	19 12 24	大村海軍病院	西山秋蔵	20 4 9	大村海軍病院				
竹下二夫	19 12 22	南洋群島	五反田政雄	20 4 9	大島島				
八木篤行	19 12 19	台湾北方海上	留岡 実	20 4 7	南洋群島方面				
松崎景雄	19 12 19	台湾北方海上	渡辺精二	20 3 26	南洋群島方面				
山口佐吉	19 12 11	面 フィリピン方	若松堅蔵	20 3 25	南洋群島方面				
有馬鉄馬	19 12 11	面 フィリピン方	新穂光雄	20 3 19	ソロモン群島				
			松田国ノ助	20 3 19	東支那海				
			川野俊章	20 3 14	本州南方海上				
			竹下武寧	20 3 19	東支那海				
			牧之瀬常吉	20 6 14	沖繩本島				
			末広直助	20 6 14	沖繩本島				
			新川 広	20 6 14	沖繩本島				
			平島晴信	20 6 29	佐世保市				
			三坂 徹	20 7 4	高松市				
			八木義正	20 7 13	南洋群島				
			吉田松蔵	20 7 27	ルソン島				
			大山敏明	20 7 20	舞鶴海軍病院				
			花房利雄	20 7 30	舞鶴方面				
			花房春行	20 8 9	長崎市				
			前田政行	20 8 9	長崎市				
			太良木静雄	20 9 19	ミンダナオ島				
			新留武夫	20 10 22	南西諸島				
			花牟礼良典	21 12 2	指宿町国立療養所				
			岩切良行	22 6 13	在郷				
			榊原儀海	22 9 5	指宿町				
			津曲英吾	22 10 26	在郷				
			酒匂政則	23 2 19	在郷				
			恒吉 (陸軍)						
			福留博美	13 6 29	中支 上海陸軍病院				
			谷山清信						

第2章 軍事

重村重之	13・8・24	瑞昌付近	橋元 栄	18・9・30	西南太平洋	新屋伊吉	19・7・5	西太平洋方面
岩切光雄	13・9・2	江西省	桑畑重良	18・10・8	西太平洋	豊留利右エ門	19・7・9	河南省兵站病院
中島敏夫	13・9・5	瑞昌付近	上村時則	18・10・22	台湾東北海上			
鮫島経盛	13・10・15	中支野戦病院	牧之瀬一夫	18・12・25	南洋諸島方面	岡元義光	19・7・10	湖南省野戦病院
井料清蔵	13・10・28	山西省付近	向井武重	19・1・7	湖北省			
新村盛次	13・11・11	瑞昌野戦病院	森山善熊	19・1・8	ニューブリテ	上原直須夫	19・7・12	マニラ方面
田上正夫	13・11・17	九江兵站病院			ノ島	小園 実	19・7・18	マリアナ島方面
佐伯貞盛	14・2・21	中支九江付近	和泉 静	19・3・1	ブーゲンビル	岩下貞吉	19・7・18	マリアナ島方
東村庄五郎	14・3・24	——	鹿島幸雄	19・3・15	ブーゲンビル			
鮫島益男	14・6・6	山西省方面	向井武信	19・3・15	ブーゲンビル			
飯屋正種	14・12・17	在郷	岡元武義	19・3・24	ブーゲンビル	徳留精次	19・7・31	ルソン島付近
野崎武夫	16・1・10	湖北省	長崎光志	19・4・2	ブーゲンビル	通山吉武	19・8・6	湖南省
上村静摩	16・2・8	南京病院	馬庭伸一	19・4・8	ハイラル陸軍病院	中原耕一	19・8・17	湖南省
中留利行	16・5・7	北支				桑畑政男	19・8・26	ブーゲンビル
井上雄太郎	16・7・2	指宿療養所	古市利雄	19・4・30	ブーゲンビル	泊 一	19・9・5	天津兵站病院
松下元規	17・2・1	小倉陸軍病院	福丸伊助	19・5・7	ブーゲンビル	阿多 晃	19・9・6	ブーゲンビル
竹之内次雄	17・7・13	在郷	柳田郷左衛門	19・5・20	ニューギニア	春田鉄朗	19・9・10	湖南省野戦病院
桑幡高志	17・9・7	在郷			島			
野村照道	18・3・3	六師団第二野戦病院	長崎 栄	19・5・26	ニューギニア	新村景儀	19・9・12	ブーゲンビル
山下正康	18・5・5	三重県大王岬	西 正雄	19・5・31	北千島	小松栄徳	19・9・15	湖南省
渡辺義雄	18・6・11	沖	奥野国武	19・6・8	河南省	桑幡 侃	19・9・21	ブーゲンビル
梨木信雄	18・9・11	ニューバル島	薬丸 肇	19・6・29	亀徳沖	泊 静彦	19・9・22	湖南省
			川之上栄吉	19・6・29	亀徳沖	野村政三	19・9・27	湖南省

第4編 近代・現代

朝倉政行	19・9・30	マリアノ島方	上	鶴田重行	20・3・10	院
中村彦熊	19・9・30	マリアノ島方	リンガエン湾	上原武二	20・3・10	大島沖海上
上村清武	19・10・2	湖北省兵站病	高橋利雄	高橋利雄	20・3・12	台湾
山下一盛	19・10・27	中支兵站病院	瀬戸重彦	瀬戸重彦	20・3・15	廣西省兵站病
森山高良	19・11・7	珍島船山列島	菊池陸軍病院	清川秀夫	20・3・16	院
佐伯正盛	19・11・10	ニューギニア	硫黄島	谷口熊助	20・3・17	ルソン島
持留一雄	19・11・15	五島列島海上	台湾安平沖	竹下義徳	20・3・17	硫黄島
中迫美之次	19・11・17	齊州島沖	ルソン島	徳留常盛	20・3・17	硫黄島方面
伊地知武雄	19・11・25	マニラ方面海	湖南省兵站病	徳丸伊三次	20・3・17	硫黄島方面
仮屋辰夫	19・11・25	マニラ西方海	東満陸軍病院	山下儀男	20・3・17	硫黄島方面
仮屋精次	19・11・26	上	ブルーゲンビル	有村豊志	20・3・17	硫黄島方面
岩下清則	19・12・1	院	ルソン島	大村 寿	20・3・17	硫黄島方面
西川千尋	19・12・4	湖南省兵站病	ルソン島	上村武良	20・3・18	硫黄島方面
長江清徳	19・12・5	ブルーゲンビル	ルソン島	野村光雄	20・3・20	廣西省
持留精次	19・12・6	ワイゲオ島南	ルソン島	森山武二	20・3・20	ルソン島
泊 一雄	19・12・11	方	ルソン島	牧之瀬寿雄	20・3・23	ルソン島
		ブルーゲンビル	満州	上村 勇	20・4・5	ニューギニア
		レイテ島	南ボルネオ	立山祐義	20・4・2	ビルマ
		レイテ島	ルソン島	有村道雄	20・4・5	ルソン島
		レイテ島	熊本陸軍病院	宮路政行	20・4・6	ブルーゲンビル
		土橋静盛	廣西省野戦病	野上田昇	20・4・7	廣島陸軍病院
						ルソン島

第2章 軍 事

西村幸雄	20・4・7	スンバワ島	谷山光雄	20・6・27	ルソン島	上村源市	20・8・31	湖北省
高尾 実	20・4・11	ビルマ	高牟礼清吾	20・6・30	レイテ島	高田伊佐雄	20・9・5	湖南省
萩原義徳	20・4・12	中支兵站病院	寺脇栄二	20・6・30	レイテ島	亀石静盛	20・9・5	ネグロス島
鹿島義哉	20・4・12	湖南省	有村直太郎	20・6・30	レイテ島	樋脇忠雄	20・9・7	宇都宮第二陸軍病院
中丸 昇	20・4・15	フィリピン	上山 弘	20・6・30	レイテ島	井上 峻	20・10・16	武昌兵站病院
小山 功	20・4・15	ルソン島	橋口清吉	20・7・1	レイテ島	盛田 博	20・10・20	バイカル湖上
田畑正夫	20・4・25	ブーゲンビル	飯屋利盛	20・7・1	レイテ島	草宮松夫	20・11・1	関東陸軍病院
鍋山浅吉	20・5・2	ルソン島	奴久妻公登	20・7・2	南方第二陸軍病院	西井田光雄	20・12・1	レイテ島收容所
樋脇辰二	20・5・6	ルソン島						
津野崎重盛	20・5・7	ルソン島	西 操	20・7・3	レイテ島	木村 進	20・12・16	ソ連收容所
堀之内篤則	20・5・7	ルソン島	田代 徹	20・7・15	ルソン島	徳満龍三郎	20・12・19	シベリア
和泉秀堯	20・5・9	ブーゲンビル	後藤日出夫	20・7・17	レイテ島	田之上正則	20・12・23	湖南省
中島清則	20・5・12	安徽省療養所	川畑磨礎夫	20・7・18	ボルネオ	西村景行	20・12・27	湖南省兵站病院
川原政雄	20・5・15	武昌兵站病院	松尾栄治	20・7・20	フィリピン			
小園琢巳	20・6・3	仏印	田上正義	20・7・20	ルソン島	川原亀太郎	21・3・19	間島省收容所
堀切 豊	20・6・7	広西省	安永一江	20・7・27	ビルマ	能勢純敏	21・3・25	ソ連
樋脇丹蔵	20・6・9	ルソン島	笠茂 新	20・7・27	ビルマ	西川一九八	21・5・7	支那派遣軍兵站病院
蓑田 栄	20・6・13	小倉陸軍病院	浜島精次	20・7・28	日置郡田布施村			
加世田行雄	20・6・15	ルソン島						
西 栄	20・6・15	沖繩	鳥丸三雄	20・7・30	ビルマ	竹元重義	21・5・25	ソ連收容所
加治木種盛	20・6・16	沖繩	中迫義行	20・7・30	ルソン島	松田虎雄	25・12・13	自宅
萩迫武則	20・6・20	ルソン島	堀之内義盛	20・8・14	ハイラル	堂免広家		湖南省
岩下重夫	20・6・21	沖繩	井上徳次	20・8・16	沖繩	稲葉誠一		
田之上正信	20・6・22	ビルマ	森山時恵	20・8・24	湖南省			

第4編 近代・現代

(海軍)									
諏訪下清	17・6・7	東太平洋	木之下重夫	19・4・19	島	野上田清	20・1・8	台湾方面	
永山盛	17・6・23	尻屋崎	清津野鶴吉	19・7・8	ラバウル	鮫島武夫	20・3・4	仏印方面	
大村純夫	17・7・4	フィリピン方面	朝倉義満	19・7・25	サイパン島	鍋山武男	20・3・19	東支那海	
泊秀吉	17・7・5	北太平洋	神宮静	19・8・2	南洋群島方面	林精一	20・3・24	東支那海	
奴久妻兼州	17・9・1	北太平洋	赤崎一夫	19・8・2	テニアン島	上原為吉	20・4・4	クエゼリン	
新村栄	17・9・4	本州東方海上	黒葛原豊彦	19・8・10	ブーゲンビル島	留岡実	20・4・7	南洋群島	
大路袈裟太郎	18・3・4	ソロモン群島	河合正男	19・8・17	西南太平洋	村下睦男	20・4・14	ソロモン諸島	
浜島精蔵	18・9・6	ニューギニア	領家主計	19・8・19	南支那海	天神淳夫	20・4・23	フィリピン	
井上保男	18・9・22	南洋群島	木之下勝美	19・8・22	マニラ湾	伊知地光雄	20・4・24	フィリピン	
曲田幸男	18・11・14	木更津航空基地	黒葛原豊喜	19・8・22	フィリピン	盛儀男	20・4・25	東支那海	
林信良	18・11・25	タラワ島	山下清治	19・8・30	大村市海軍病院	中島森枝	20・4・25	ソロモン群島	
稲留博雄	18・11・25	タラワ島	奥野景儀	19・10・10	院	小川原照四	20・5・10	徳山燃料廠	
山下正秀	18・11・25	タラワ島	薬丸才蔵	19・10・18	南西諸島	能勢達志	20・5・16	徳山燃料廠	
川畑馨	19・1・16	本州南東	奴久妻哲夫	19・10・25	フィリピン	村上政雄	20・6・14	沖繩方面	
永山操	19・1・25	トラック沖	上玉利米吉	19・10・25	フィリピン	豊盛長	20・6・14	沖繩方面	
長崎嵩	19・2・6	南洋群島	橋元慶次	19・11・19	南支那海	高尾武吉	20・6・14	沖繩方面	
高野哲夫	19・2・6	クエゼリン島	持留忠美	19・12・18	別府海軍病院	稲留三郎	20・6・14	沖繩方面	
谷口千里	19・2・15	ソロモン	新村忠志	20・1・4	ソロモン群島	太良木道行	20・6・15	沖繩方面	
前原好晴	19・2・21	ビスマルク群島	勝元正雄	20・1・6	方面	伊集院保雄	20・7・28	台湾	
立山祐則	19・2・21	ビスマルク群島	勝元正雄	20・1・6	面	太良木静雄	20・9・19	フィリピン	
					フィリピン方面	新福逸	21・2・12	ソ連	
						溝口泉	21・4・17	満州陸軍病院	
						大保正広	21・4・29	在郷	
						柳伝徳	24・6・29	在郷	

第2章 軍 事

山下澄武	森島秀義	佐々木綱盛	永田勇吉	その他(警察、動員)	萩原正夫	中島禎三	月野	(陸軍)	松田親雄	持田 勇	馬庭 弘	竹元時憲	若田精一	吉田正行	牧原善蔵	桑元南兵衛	桑原栄助	津留親則	飯屋鹿男
1					20・3・10	20・8・11			14・7・27	14・8・29	14・8・29	14・8・29	14・8・29	14・9・24	14・11・16	15・1・4	16・8・6	16・11・8	16・12・21
在郷	在郷	佐多沖	在郷		東京都(警察)	長崎市(学徒動員)			満州	満州	満州	満州	満州	満州	南支	支那	鹿児島陸軍病院	小倉陸軍病院	フィリピン
竹元計左市	青木光盛	萩元市郎	藤田国丸	大園正美	川之上甚吉	岩水国義	池田勝哉	太田甚志	竹田純義	吉村 進	坂口秀雄	吉崎信孝	上門清一	津留時則	児丸 昇	大高政雄	宮原辰男	丸岡次雄	津留計佐次郎
16・12・21	17・2・11	17・6・30	17・8・5	18・1・5	18・1・20	18・1・21	18・1・21	18・2・4	18・3・14	18・5・15	18・5・16	18・10・8	18・10・8	18・11・9	18・12・10	18・12・18	18・12・20	19・1・15	19・1・27
フィリピン	ビルマ	北支	南部仏印	小倉陸軍病院	西南太平洋	ソロモン群島	ブルーゲンビル	南方諸島	熊本陸軍病院	広東陸軍病院	満州	西太平洋	西太平洋	ソロモン群島	霧島村	関東陸軍病院	熊本陸軍病院	中支陸軍病院	ソロモン群島
和田光雄	新原勝哉	湯ノ前登	吉原一夫	秋田義雄	本村義雄	小田重義	吉田徳義	田口 勲	植木静雄	上野留吉	松尾徳蔵	瀬戸景教	福江 伝	高橋清造	高城貞丸	富永嘉一郎	山内朝健	徳留 勇	岡元義則
19・3・17	19・3・24	19・4・11	19・5・7	19・5・18	19・6・9	19・6・15	19・6・19	19・6・29	19・7・12	19・7・23	19・7・23	19・8・7	19・9・1	19・9・10	19・9・18	19・9・23	19・10・4	19・11・1	19・11・5
ソロモン群島	ソロモン群島	満州	ソロモン群島	旭川陸軍病院	亀徳沖	ブルーゲンビル	ブルーゲンビル	島	亀徳沖	ニューギニア	北硫黄島沖合	ソロモン群島	中支	中支	漢口陸軍病院	奉天陸軍病院	満州	中支陸軍病院	南方カガラン

第4編 近代・現代

持田純雄	19.11.17	東支那海	勢原通二	20.3.31	フィリピン	川北義秀	20.7.12	朝鮮海峡
義川一己	19.11.17	東支那海	石川達夫	20.4.3	フィリピン	谷口静彦	20.7.15	ルソン島
前野富雄	19.11.17	東支那海	佐々木秀雄	20.4.10	中支陸軍病院	川畑武夫	20.7.16	ソロモン群島
北岩利則	19.12.9	第十一野戦病院	坂口光夫	20.4.12	中支	樺山正夫	20.7.17	フィリピン
吉井衛	19.12.17	院	和田純雄	20.4.15	舞鶴海軍病院	坂中純幸	20.7.18	千葉県
古城良知	19.12.21	中支野戦病院	上井義教	20.4.20	フィリピン	徳留親信	20.7.20	フィリピン
義川長三	20.1.20	島	川崎輝男	20.4.21	沖繩	入佐俊光	20.7.23	フィリピン
中留金蔵	20.1.26	フィリピン	新川金之助	20.4.21	沖繩	内 広義	20.7.24	支那野戦病院
宮内通秋	20.2.4	中支野戦病院	忠隈房子	20.4.21	東京陸軍病院	東條静哉	20.7.25	中支
東條正義	20.2.18	フィリピン	古川甚蔵	20.5.10	沖繩	鳥丸秀雄	20.7.30	朝鮮野戦病院
瀬口重義	20.3.4	北支	吉田市郎	20.5.10	フィリピン	上ノ瀬弘	20.8.3	ルソン島
小田清一郎	20.3.17	硫黄島	永野武彦	20.5.10	沖繩	中内清二	20.8.14	フィリピン
高 良雄	20.3.17	硫黄島	梅木仁之助	20.5.15	フィリピン	藏満国行	20.8.15	沖繩
桑原俊男	20.3.17	硫黄島	窪田親雄	20.5.17	硫黄島	尾野三郎	20.8.21	中支
前畑綱義	20.3.17	硫黄島	福富文雄	20.5.19	沖繩	東條武次	20.8.24	奉天市
東山辰己	20.3.17	硫黄島	森元一雄	20.6.10	フィリピン	岡元 優	20.9.25	中支
古川俊雄	20.3.17	硫黄島	丸岡資義	20.6.15	南支	吉田二雄	20.10.20	ソロモン群島
高城秀雄	20.3.17	硫黄島	児丸政盛	20.6.17	硫黄島	宮原寅二	20.11.2	屏東陸軍病院
松田景信	20.3.20	硫黄島	大迫斉美	20.6.18	沖繩	下岡 操	20.12.31	満州
坂口景雄	20.3.24	硫黄島	吉田 伝	20.6.20	フィリピン	大村敏治	21.4.15	自宅
太田一郎	20.3.27	硫黄島	松尾 初	20.7.1	フィリピン	福田栄次	21.4.18	中支
川下 翠	20.3.31	フィリピン	高 盛義	20.7.4	奉天陸軍病院	中迫正雄	22.5.18	ソ連
			藤田辰雄	20.7.7	チモール島	山本景美	22.6.25	ソ連
			肥木田道雄	20.7.10	フィリピン	岩広一二	22.8.22	南支

第2章 軍 事

尾田義治	23・1・15	自宅
小原秀夫		
北村政雄		
新川 操		
高山美利		
上ノ瀬百明		
(海軍)		
牛原 洋	14・12・12	呉
鳥丸景雄	16・9・25	佐世保海軍病院
忠隈二夫	16・12・2	ソロモン群島
福重秀則	16・12・11	南洋群島
下井田光夫	17・2・18	ジャワ島
中内 実	17・6・5	中部太平洋
新納光夫	17・7・15	北太平洋
黒木栄次	17・12・28	南洋群島
中迫一美	18・12・31	南洋群島
上野茂雄	19・1・16	南海方面
吉川一雄	19・3・13	本州南海
徳山 操	19・4・27	南洋群島
松村末吉	19・5・19	時雨艦内
吉田 統	19・6・4	中部太平洋
竹元武徳	19・6・26	愛媛県
柴 数馬	19・7・18	マリアナ群島
鮫島佐藤雄	19・8・10	南洋群島
木村時義	19・10・19	大村海軍病院
樺山俊夫	19・11・13	フィリピン沖
中内光則	19・11・21	台湾沖
吉富 勇	19・11・21	台湾沖
和田富雄	19・12・19	台湾沖
佐々木功	19・12・20	臺北
川之上義幸	19・12・31	南洋群島
井上三郎	20・1・25	台湾
野村則光	20・2・26	フィリピン
尾田義一	20・2・26	フィリピン
持田 勲	20・2・27	横浜市
奥野 侃	20・3・13	南支那海
平松実行	20・3・28	セレベス
藤元 諭	20・3・29	南洋群島
上ノ瀬辰二	20・4・19	南西諸島
川畑利夫	20・4・28	フィリピン
福田澄則	20・5・15	ニューギニア
内田利治	20・5・25	朝鮮海峡
友田豊蔵	20・6・11	沖縄
池田春光	20・6・18	フィリピン
富岡時成	20・7・10	フィリピン
岩広正一	20・7・28	広島県
持田重己	20・7・30	ルソン島
富永俊夫	20・8・9	長崎市
村上隆雄	20・8・20	フィリピン
山中武夫	20・12・29	自宅
川下辰雄	21・7・22	久里浜病院
上野景雄	21・9・18	満州
井上伝四郎	21・11・21	自宅
渡辺時盛	25・7・19	都城市
(陸海不明)		
猪ヶ倉健吉	20・6・4	沖縄
田ノ上生		
(その他)		
坂口親信	13・8・23	満州(警察)